
変人達のラブソディ

霧野ミコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変人達のラブソディ

【Nコード】

N3230Q

【作者名】

霧野ミコト

【あらすじ】

『僕は普通だ！！変なの彼女！！』

『いいえ、変なのは彼よ！！だって、あたしの魅力に落ちなかったんだもん！！』

『……とりあえず、お前ら二人とも変だろ』

『普通！！』

学力普通・運動神経普通・容姿普通・性格普通

そんな普通四拍子がそろったどこにでもいるような少年。

頭脳明晰・運動神経抜群・容姿端麗・性格極上

そんな四拍子がそろった才色兼備な現代の大和撫子な少女。

ただ、少年はちよっぴり見ている世界が変で、少女は美的センスがちよっぴり変。

そんな変人二人が織り成す勝手にしてください風おのろけ小説。

100のお題挑戦です。

一話が短かったりするのとはもととネタ小説なので、そういう仕様です。

物は試しって言うじゃない

今日一日の荒仕事を終えて、僕は帰途へと着く。

まあ、荒仕事なんていえば、聞こえはいいけど、単に一日授業を受けてきただけの事。

とはいえ、それでも、僕にしてみれば、かなりきつい作業に違いはないが。

なんと言っても、やはり高校の授業なんて眠い。

もうこれでもかと言っぐらい眠い。

数学やら物理やらなんかは特に眠い。

まるで、スリープをかけられているようだ。

て、スリープを知らない人もいるか？

これは、某ソフトにある強制的に眠りにつかせる魔法だ。

まあ、それがどうしたと言われたら、そこまでだけど。

だいたい、そもそも僕は物理なんて物を取っていない。

とりあえず初期の設定時点で間違えているのだ。

と言っわけで、テイクツー。

数学なんかは特に……

あほらしい。

僕は、脳内でいったい何をしていると言うのだ。

全くの無駄じゃないか。

まあ、僕は無駄をこよなく愛する人種だから、それはそれでいいけど。

そもそも、最近の人たちは無駄を毛嫌いしすぎだ。

無駄の何が悪いと言うのだ。

効率優先していると、いつかきつと限界が来る。

もう目先の欲にとらわれて、先が見えてないからだ。

まあ、目先の欲にとらわれてるから、効率的にできないという事もあるが、それはこの際そこらへんに掃いて捨てておく。

僕が言いたいのはそんな事じゃなくて、無駄なように見える事もきつとたまに役立つ時があるのだ。

まあ、その時点でその行為は無駄ではないけど、やっている時点では無駄だから、無駄なんだ。

だと言うのに、最近の教育と言ったら、完全に無駄を取り払おうと

しているのだ。

なんと愚かな事だろう。

もう、あまりにも哀れ過ぎる。

さて、さっさと帰るか。

上履きを脱ぐと、下駄箱をあける。

とりあえず、いきなりの話題転換できつと読者は驚いているだろう。

まあ、僕的にはおもしろいから、ありだ。

読者の驚愕の顔がもうありありと浮かんでくる。

「くくく」

そう思うと笑いが止まらない。

「ぐふふふっ!!」

と言つか、ツボにはまってしまった。

我ながら、楽しい人生だと思う。

まあ、周りから奇異の目で見られているが、そんなものは気にしない。

「滅殺」

とりあえず、証拠隠滅をするから。

よし、これで、万事オーケーだ。

埃を軽く払うと、上履きをしまうと、靴を出す。

すると、それと同時に一通の便箋がひらりと落ちてきた。

それを取り上げて、宛名を見てみると、そこにはしっかりと僕の名前が書かれている。

ちなみに、僕の名前はビル・ゲイツだ。

なんていうのは、嘘で、本当は、ジョージ・ワシントンです。

……なんか、おもしろみがないなあ。

とりあえず、本当のところは紺野都です。

まあ、それはさておき、とりあえず、裏を見てみると、

『2 - B 竹原結奈』

差出人の名前も書かれている。

どうやら、その差出人とやらは、同級生の女子のようだ。

「……」

……ふおおおおお！！

そして、一コマほどはさんだところで、ようやく状況が理解で来た。
つまりところ、これはラブレターと言うものなのだ。

2・Bの竹原結奈嬢は、その小さな胸に熱い情熱のパトスを抑えきれず、こうして僕に恋文を送ってきたのだ。

とりあえず、不幸の手紙とか決闘状とかの案は却下だ。

乙女にそんな事をさせるわけには行かない。

はてさて、それはいいとして、中身を確認して見よう。

とりあえず、便箋を開封すると、中身を取り出し、確認する。

『好きです。もう、死にそうなほど好きなんです。貴方が居ないと心が乾いて、脱水症状を起こしそうなほどなんです。というか、むしろ、もう愛してます。バイカル湖よりも深く愛しています。今すぐ、役所に婚姻届を出しに行きたいほど、愛してます。この私の熱い情熱を受け止めてください。今日の放課後、貴方が私のこの熱い想いを受け止めてくれる事を願って、中庭で待ってます。ぜひ来てください』

そして、それを僕は、懷にしまうと、いきおいよく外へと飛び出す。
もちろん、目的地は家だ。

こんな妖しい、というか、いかれた恋文なんか受け取れない。

なんか、もうすぐにでも、精神病院にお連れしたいほどの内容だ。

なので、もちろん、会いたいと思わない。

むしろ、できる事なら一生会いたくない。

やはり、普通が一番なのだ。

そして、夕焼けの街並みを走り去った。

翌日、僕は普通どおりに、登校した。

ちょっと、昨日のいかれたラブレターが脳裏に浮かんだが、記憶の底から抹消した。

あんな恐ろしいものは、覚えておきたくはない。

精神衛生上よろしいものではないし。

そして、教室に着くと

「おはよう」

クラスのお友達にそう投げかける。

やはり、一日の始まりはこれだ。

元気のいい挨拶だ。

けれど、返事は返ってこない。

全くの無反応。

どうしたものだろうか。

そう思って、周囲を見回す。

けれど、なぜか、クラスのお友達は僕と目をあわせようとはしてくれない。

はてさて、いったい何があったのだろうか？

そんな事を考えていると

「どうして、昨日は来なかったの？」

唐突に、僕の目の前に一人のクラスのお友達が現れた。

けれど、なぜかクラスのお友達のはずなのに、見覚えがない。

一応、記憶力はあまり良くないほうだけど、さすがにしっかりとクラスのお友達の顔は覚えている。

なので、見覚えがないって事はないはず。

と言う事は、とりあえず、クラスのお友達ではないのだろう。

けれど、そうすると今度は別の疑問が浮かんでくる。

クラスのお友達ではない彼女が、なぜ僕の前に居るのかと言う事だ。
なんだか、さっきおかしい事を言われたような気がしたけど、たぶん空耳だと

「ねえ、どうして来なかったの？」

そんな事を思っていると、さらに彼女は続けた。

どうやら、空耳ではなかったらしい。

けれど、空耳でなかったのなら、それはそれで大変だ。

「身の危険を感じたから」

とりあえず、僕は素直にそう答えた。

彼女の言った言葉で推察をした結果だ。

まあ、僕にあった約束はとりあえず一つ。

あれを約束と言えるかどうかは別だが、一応あれも呼び出しだろう。

「……そう」

けれど、僕の答えを聞いた彼女は、本当に悲しそうな顔をする。

と言うか、さっきからじっくり見てみて思ったけど、この少女、か

なりの美少女だ。

そう言えば、昨日、僕が証拠隠滅のために殺した友人の話では、この学園には大和撫子がいるらしい。

と言う事は、彼女がその大和撫子なのかもしれない。

名前も、確か、竹原結奈だったと思うし。

「やっぱり、あの台詞がだめだったのね。よし、んじゃ、作戦Bね」

彼女姿を観察しながら、そんな事を考えていると、不意にぼそりと彼女がつぶやいた。

なんだか、その内容は、ちよっぴりその姿に似合わない。

「紺野くん、あたし、紺野君の事が好きなの、付き合ってくれな
いかな？」

けれど、そんな事をのんびりと考えていると、次なる攻撃が来てしまった。

なんだか、やけに間延びした猫なで声。

というか、そんな声で、こんなところで、なぜ告白するのだろうか？

彼女には、羞恥心と言うものがないのだろうか？

とりあえず、僕は、かなり恥ずかしい。

うん、それこそ……

「え、ちょっと、なんで掃除用具入れに入るの!？」

とりあえず、掃除用具入れに避難するほど恥ずかしい。

「ほら、出てよぉ」

けれど、あっさりと捕まると、外へと引きずり出される。

なんだか、こんな事をされると、余計に恥ずかしい。

まあ、よくよく考えてみると、掃除用具入れに入る事自体が恥ずかしいような気がする。

さて、それはそこらへんに置いておいて、こうして出された以上、とりあえず逃げる事は難しいようだ。

しっかりと、制服を掴まれているし。

「で、答えは？」

どうやら、とりあえず、返事を聞くまで、離さないらしい。

まあ、そうじゃないと、引きずり出すような事をしないだろう。

はてさて、そうとなると、正直困った。

周りを見てみれば、興味津々のご様子。

特に、男子は涎を垂らし、目を充血させている。

……とりあえず、気持ち悪いな。

僕は、それを見なかった事にすると、彼女の方へと向きなおす。

相も変わらず、美少女だ。

まあ、数秒の内に顔が変わったら怖いが。

さて、答えはどうしたものか。

いや、まあ、答え自体は決まっているのだが、どうやって切り出すかが問題なのだ。

とりあえず、間接的に行くべきだろうか？

まあ、傷つけるのも可哀想だし。

それ以上に、暴走したら怖いし。

昨日の手紙の内容からして、暴走した時の姿が想像しただけで、泣きたくなる。

けれど、だからと言って間接的に言ったところで、きっと通じないと思う。

なんとなくだけど、とりあえず精神異常者には、そういうまどろっこしいものは通じない気がする。

なら……

「とりあえず、付き合えません」

直球しかない。

まあ、変化球が投げられないんだからしかたないけど。

「がーん」

それはいいとして、僕が直球を投げると、彼女は目に見えて分かるほどショックを受けている。

思いつきり、口で言っている時点でなんとなくわざとらしいけど、ここらへんは無視する。

気にしたら、負けのような気がするし。

「作戦Bでもだめか。よし、最終手段ね」

うん、きつと負けだ。

つまり、これも空耳なんだ。

きつと。

「そ、そんな事言わないでよ？ほら、お試し期間みたいな感じでもいいから」

そして、めげない彼女はさらに続ける。

今度は、サンプル作戦のようだ。

というか、これがなぜに最終手段……

いや、そんな事は聞いてないから、知らないよ。

うん。

「とりあえず、君と一緒に居ると目立ちそうだからやだ」

それよりも、断る事の方が大事だ。

精神異常者と一緒に居るとやはり目立ってしまう。

とは言っても、別に僕はそういう人達を卑下しているわけではない。

単に、彼女が特別なだけなのだ。

本来は健常者のはずなのに、わざわざいかれた風に装っているのだから、その扱いで上等だ。

それよりも、なんだか、周囲の視線がどんどんきつくなって来ているような気がするし。

「だ、大丈夫。それはきつと慣れれば、大丈夫だし」

けれど、そんな僕の思いを全く汲まない彼女は、さらに続ける。

とりあえず、何が何でも引く気はないらしい。

「ごめん。僕は普通を愛しているんだ。普通こそが最高なんだ。だから、君が居てはだめなんだ!!」

なら、こちらも、もう引く気はない。

とりあえず、自分の守るべき物は守る。

「そ、そんな事言わないで!!私ほこんなにも貴方を愛しているのに。もう貴方なしでは生きていけない身体にされてしまったのに!!」

けれど、それでも彼女はねばる。

なんだか、ものすごく台詞口調なのは気のせいだろうか？

というか、さらりと大声で物凄い事を言ってくれた。

とりあえず、狼さん達が目つきを変えた。

ついでに、女性陣は、汚物を見るような目で見てくれる。

「紺野君で、実は鬼畜だったんだ？」

「え、何？もしかして、あっちの趣味があっただんだ？」

「きつと、あれよ。嫌がる竹原さんに無理やり……」

「え、それって犯罪じゃ……」

『紺野君、最低』

というか、完全に犯罪者扱いだ。

「ちょ、む、無罪だ！！冤罪だ！！僕には、そんな趣味なんてない！！」

とりあえず、否定してみるが、彼女達は信じてくれるようすはない。やはり、世間は美少女の味方なのだ。

「ね、責任を取ってよ？」

そして、とどめに、彼女はそう言った。

その瞳にはチェシャ猫のように、子憎たらしいほど笑みが浮かんでいる。

「アイアイサー」

結局、僕は白旗をあげた。

まあ、とりあえず、彼女が言ったように、物は試しって言う言葉もあるし。

試してみて、意外といい結果だって出る可能性はあるし。

というか、出てくれないと困るんだけど。

全ては在るがまま

「おはよう、クラスのお友達!!」

僕はいつも通りにそう声高々に叫ぶと、教室に入る。

「お、都か。おはよ」

けれど、クラスのお友達の反応はない。

全くと言っていいほどない。

皆、どうしたと言っのだろう。

あれほど、深い友情の絆で結ばれていたと言っのに。

もしかして、これが今流行のいじめと言っものなんだろうか。

いや、きっとそうなんだろう。

クラスの女王か帝王が覇権を握り、哀れな子羊な僕をなぶり殺しにしようとしているのだろう。

「いや、おい、無視すんなよ」

くそ、僕は負けないぞ。

権力なんかには屈しない。

僕には、正義と言う名の剣がある。

「おーい、お前の親友が呼びだぞ？」

とりあえず、真っ先にする事は、雑魚の殲滅だ。

やはり、恐怖の魔王と戦うのならば、これが王道だ。

雑魚から倒してレベルを上げていく。

これこそが、覇権を奪い返す近道だ。

「すまない。僕は本当は戦いたくないんだ。できる事なら、静かに平和に暮らしたいんだ。だけど、世間が、世界が、うっん、運命が、僕に戦えと言っただけ！」

そして、僕は、拳を握ると、力を込めた一発を目の前に居る雑魚へ。

「な、なんで！？ぐへっ」

とりあえず、ザコウォーリアーを一撃の下でしとめる。

ちなみに、某機動戦士シリーズとは全く関係がございません。

「どうして、戦争はなくならないんだろう。どうして、静かに暮らせないんだろう。ここは、こんなに静かなのに」

けれど、討ち取った雑魚を見下ろすと、なんだか切なかった。

やはり、いつの世も戦争と言うものはかくも切ないものなのだ。

けれど、僕は止まらない。

止まらない。

だって、僕は、彼が示す道を進めないから。

僕達には僕達の道があつて、それを強制する事はできないし、させたくないから。

周りを見回す。

悪の一団は、呆然としている。

あっけなく先鋒が打たれたのがショックなだろう。

けれど、こちらからして見れば、やはり弱いのだ。

さあ、次は誰だ。

誰が来ると言うんだ!!

だが、誰が来ても、恐るる足らず。

今の僕は最強だ。

「ねえ、何をしてるの、都君」

「ひいい!!いきなりラスボスだ!!」

だがしかし、なんて事だ。

いきなり、ラスボスなんて。

しかも、向こうはなんと最高の武装で来ている。

だというのに、こっちは拳のみ。

シールドは、先ほど前線基地に置いている。

さらに、こっちはエネルギー切れ寸前だ。

くそ、デュートリ。ンビームは、射出してくれないのか!!

核エンジン搭載機の彼女が羨ましい。

「僕の負けだ。くそ、蒼き清浄なる大地を守る事ができないとは…」

完全な劣勢。

というよりも、負け戦。

その場に崩れる事しか出来ない。

調子に乗った僕がいけなかったんだ。

新しい機体をもったからと言って、調子に乗りすぎたんだ。

怒りの翼を持った少年も調子に乗りすぎて、自由の翼の少年どころか、その親友相手に負けてしまったではないか。

というか、そもそも、あれは自爆みたいなものじゃないか。

なんと言っ事だ。

「とりあえず、落ち着いたらどうだ？きつと、お前の言っている事
の大部分かって居ないだろうし」

ザコウォーリアーの彼がよみがえり、僕の肩を叩く。

その瞳はどこまでも優しい。

ああ、なんて事だろう。

僕は、なんて間違ってしまった事をしてしまったんだろう。

そうだ、闘いに闘いで応対してはいけないのではないか。

ペンは剣よりも強し。

そう言っではないか。

「ありがとう、ザコウォーリアー。僕は大切な物を忘れてしまっところだったよ」

そんな事を思い出させてくれた彼に謝辞を言っ。

本当に、ありがとう。

「とりあえず、僕は、月に行くよ。あそこなら、きっと僕を受け入れてくれる。種を持っていない僕でもきつと受け入れてくれる」

そして、僕は、彼の手を振り解くと、教室を出る。

否、青い星から飛び立つ。

目指すは月！！

きつと、そこにたどり着ければ、僕はきつと幸せになれる。

「ああ、保健室に行くの？大丈夫？あたしがちゃんと看病してあげるからね」

なのに！！

そう思ったのに！！

なんと、彼女は僕を追いかけてくる。

逃がすつもりはないらしい。

なんと、恐ろしい事だ。

誰か、助けてくれ！！

「諦めろ。それが運命だ」

けれど、運命は残酷だった。

新たな友は、僕を見捨てて、割り切ったように、そう言う。

その瞳が全てを語る。

世には、幸せなんて物はないのだと。

そう、諦めて、全てを受け入れるしかないのだ。

あるがままを。

消える魔球

「ねえねえ、何してるの？」

悪魔の声が背後から聞こえた。

なので、とりあえず、無視。

たぶん、きつと後ろを振り向いた瞬間に魂を抜かれる。

そう言うタイプの悪魔だと思われる。

「くらえ！！必殺消える魔球！！」

「あ、汚え！！反則球だろう、それ」

「言い訳はそれだけかい？くくく、さあ、チェンジだ」

それに、今はそんな事をしている場合ではない。

男と男の対決。

まさしく、男の中の漢を決める戦なのだ。

周りに気を取られている場合ではない。

「くそ、覚えてろよ」

友人がそう言いながら、席を立つ。

僕もそれに合わせて、攻守のチェンジ。

ここまでくれば、分かるだろうけど、今僕達は野球ボードをやっている。

なぜか、家の物置にあったので、持って来たのだ。

とりあえず、校則違反とかは関係ない。

盟友である菅原教諭から、許可は取ってある。

その代わり、後で彼に貸す事になっている。

どうやら、昔の血が沸くらしい。

とりあえず、さすがは僕の盟友なだけはある。

「くられ、消える魔球!!」

「甘い、必殺魔球返し!!」

「な、何!？」

さて、それよりも、男同士の対決。

けれど、既に結果は分かったような物。

我が友は、この満塁と言うときに、間抜けな事にしよっぱなから、魔球を投げてきた。

けれど、既にその魔球の弱点など、白日の下。

そんなものは僕には通用しない。

とりあえず、満塁ホームランを打ってやる。

目の前に居る友人は、絶望に打ちひしがれ、某ボクシング漫画風に燃え尽きて、真っ白になっている。

「ふ、いつの世も、闘いとはむなしいものだな」

哀れだと思いつつ、最後のきめ台詞。

これで、僕の勝利だ。

だいたい、このゲームで僕に勝とうと言うのがまず甘いのだ。

僕が持ってきたものだ。

とりあえず、細工されてられている事ぐらい感づかないようではまだまだだ。

「友よ、安らかに眠るがいい。僕は、そのお前に代わって、これを持って、オアシスへと旅立つ」

そして、そんな哀れな友人を見下ろしつつ、席を立ち、教室を飛び出す。

目的地は既に決まっている。

オアシスだ。

靴を履き替え、学校を出る。

いつになく、颯爽と風を切る自分が切なくなるほど美しく思える。

否、美しいに決まっている。

きっと、今なら、この姿で万人の女性のハートを射抜く事が出来る。

出会った瞬間フォーリンラブだ。

さあ、そして、目的地にたどり着いた。

着いたと同時に、僕は、

「カフェロワイヤル一つ！！引き換え券は、これです！！」

秋葉系男の男心を驚づかみにするようなエプロンドレス姿をした女性に券を渡す。

「はい、確かに引き換え券の方はいただきました。どうぞ、こちらがカフェロワイヤルになります」

それを受け取った彼女は、確認すると、カフェロワイヤルを手渡す。

途端に、上品な香りが鼻腔をかすめる。

我らがオアシス、洋菓子店ヴェロナの超プレミアムスイーツ。

一日限定生産数5つの至高のスイーツ。

これを買ったために、人生をかけるという人すらいると言われるスイーツだ。

それを、今日、我らが、盟友菅原教諭に、野球ボード貸与の謝礼としていただいたのだ。

彼は、スイーツには興味がないから。

さらに、あげる相手も昨日振られたから。

だから、それを賭けて、我らは戦った。

そして、僕は勝ったのだ。

さあ、今こそ、この超プレミアムスイーツとの優雅な一時を過ごさん！！

「いただ——ぬぁ！？」

いざ、尋常に食そう。

そう思って、手を伸ばしたときには、既にそこには何もなかった。

絶望的なほど何もなかった。

その代わりに、目の前には

「へえ、さすがはヴェロナのカフェロワイヤルねえ。五つ星レベル」
悪魔がいた。

しかも、口のはたにクリームがついてるところからして、彼女が奪い取ったのだろう。

これもいわゆる消える魔球と言うものだろうか。

て、全然うまくないわ！！

「く、くそお！！ば、僕の——僕の夢を返せ！！」

それが余計に悔しい。

僕は、彼女から惨劇にあったカフェロワイヤルの亡骸を奪い取る。

せめてもの慈悲を。

亡骸に付いたクリームを指で取り、それを舐める。

ああ、かなり美味しいはずなのに、なんだろう、この敗北感は。

この絶望感は。

ちくしょう、これじゃあ、足りない。

僕の悲しみは消えない。

僕の飢えは、まだ消えない。

どこだ、どこにいる！？

僕の夢は！？

そして、僕はついに見つけた。

まだ、残っている夢のかけらを。

もう、指で取るのは煩わしい。

直接舐める。

ぺろりと舐めてやる！！

そして、全て舐め取ったところでようやく気が付いた。

そのクリームはどこについていたのかと言う事を。

さらには、ここがいったいどこなのかと言う事を。

周囲からは切なくなるほどはやし立てるような声が聞こえた。

甘い声

「ねえ、都く〜ん」

その声を聴いた瞬間に僕の中で警報がなった。

彼女がやけに間延びした猫なで声で何かを言ってくるときは、確実に危険なときだ。

「チュウしてえ」

案の定、予感的中。

避難勧告レベルの危険度だ。

「ほら、そんなに、ちゅうして欲しいなら、そこに、一人寂しい独身貴族が居るから、してあげなさい」

とりあえず、牽制のパンチを入れとく。

ちなみに一人寂しい独身貴族とは、我らが盟友菅原教諭だ。

最近、新しく出来た彼女にまた振られたらしい。

可哀想な人だ。

「やだ。こんな粗大ごみみたいに、処理が困るような人は」

だから、心優しい僕としては、ちょうどいい相手を見繕ってあげたと言っのに、彼女は一刀両断にしてくれた。

と言っよりも、もう少し思いやりと言っ物を持つべきだと思っ。

現に、可哀想な盟友はしずしずと泣いている。

まあ、その姿が、彼女の言っ通り粗大ごみに見えたけど、それはこの際気にしない。

「それに、あたしは、都君がいいの。て言っか、都君じゃないと嫌なのぉ」

それよりも、この悪魔をどうにかするしかない。

「ほら、ちゅう。ちゅう。ちゅーっ」

……処刑してしまおうか？

一瞬あまりにも腹に据えかねて、殺意が沸いたが、どうにか押しとどめる。

とりあえず、この年で犯罪者になるのは勘弁して欲しい。

まあ、いつになっても、犯罪者にはなりたくないが。

というか、なってはいけないが。

さて、それよりも、この目の前の悪魔の処理が大変だ。

ある意味、粗大ごみの処理の方が楽だろう。

て、粗大ごみ以下の彼女ってどうよ。

ま、まあ、気にしないで置こう。

気にしたって、何も解決しないし。

「分かった。けど、恥ずかしいから、目を閉じてくれるかな？」

とりあえず、この場合は誤魔化しておこう。

できるだけ優しく語り掛けるようにそうつぶやく。

「う、うん」

彼女は、期待に胸を膨らませつつ、目を瞑る。

なんだか、その姿が非常に初々しい。

まあ、僕もこれがいわゆる初チュウなのだが。

とはいえ、本当にするつもりはないが。

「んじゃ、行くよ」

そつと、彼女の頬に左手を添えて、唇を近づける。

彼女もそれが分かるのだろう。

少しだけ息遣いが乱れる。

それは、願ってもない好機だ。

乱れれば、その分だけ、意識は明瞭とならない。

そつと、唇を近づけ、彼女の唇に触れる。

僕の人差し指と中指を間に入れて。

そして、すつとすぐに離れる。

長い間やっていると、ばれる可能性があるからだ。

とはいえ、これで十分に通じるかどうかは妖しい。

これは、所詮本の中のネタなわけだし。

彼女が、そつと目を開ける。

その瞳は光り輝き、そして潤む。

頬は上気しており、その姿から、連想されるのは

「あ、ありがとう。あ、あたし、もう物凄く幸せ。もう、死んでもいい」

とりあえず、成功と言う事だろう。

まあ、騙すという事に少々抵抗を感じるが、悪魔と戦うにはこれぐ

らしいないとだめだろう。

とりあえず、無事貞操は守りきりました。

まあ、初チュウを貞操と言っているのかは妖しいものだけど。

酷く憂鬱な青

「やれやれ」

何とか悪魔を振り切った僕は、ため息混じりそう言つと、その場に座り込む。

上を見上げると、青い空が広がっていた。

とりあえず、屋上へと逃げてきたのだ。

ここなら、あまり人は来ないから、大丈夫だと思う。

一応、屋上は使用禁止になってるし。

まあ、僕は盟友から鍵を拝借しているから、いつでも使えるけど。

使った鍵を、ポケットに入れると、上へと上る。

まあ、上と言つたら、どこだと聞かれるかもしれないけど、上と言つたら上だ。

とりあえず、そこをなんと云うかは知らない。

でも、屋上に出た事があるなら、誰でも知っているはずだ。

階段がある上の部分、貯水タンクがあるところだ。

そこに上ると、貯水タンクの陰に隠れる。

とりあえず、念には念をと言ったところだ。

貯水タンクに背を預けると、空を見上げる。

相変わらず、腹立たしいほど空は青く澄んでいる。

そう言えば、悪魔が告白して来たのも晴れていた。

なんだか、晴れると言つのは、縁起が悪いな。

悪い事ばかり重なって居るじゃないか。

とはいえ、まあ、基本的に晴れている日が多いんだから、それは当然なのだが。

それでも、この青い空が憎らしい。

とりあえず、金色に塗りたくってやりたいぐらいだ。

まあ、それはそれで、まぶしすぎて、うざったいだろっけど。

にしても、のどかだ。

なんだか、久しぶりのような気がする。

こんなに穏やかに学校で居られるのは告白されて以来だ。

それを考えるといかに彼女が僕の事を振り回してくれているのかが、良く分かる。

全く、いい加減にしてもらいたいものだ。

もう、タバコがあれば今すぐにでもふかしてしまいそうなのだ。

いや、まあ、嘘だけだ。

とりあえず、タバコは嫌いだし。

だって、健康に悪いんだよ？

死亡率が上がるんだよ？

それが分かっていてすえるわけがないじゃん。

全く吸ってる人の気が知れないね。

ガチャ、と物音が響く。

ぼんやりと考えていると、不意にドアが開いた。

これはもしかすると

「ここにも、いないのかなあ。でも、なんかいそうなんだよねえ」

と思ったら、案の定、誰かが屋上に来たみたいだ。

しかも、悔しいほど、それこそ、泣きたくなるほど聞き覚えのある声。

そうあの悪魔だ。

どうやら、その恐ろしい嗅覚でここまでやってきたらしい。

「あ、この上とか怪しそう」

そして、その嗅覚はついに、僕の匂いを捕らえたらしい。

はしごを上る音がする。

これは、危険だ。

身の危険大だ。

とりあえず、彼女が上ってくるほうとは逆から降りる。

そして、それと同時に、壁に身体を這わせて、ゆっくりと、頭上を確認しながら、迂回して、ドアへと向かう。

「あれ、いないかあ。ここだと思ったんだけどな」

上りきったのだろう。

悔しそうな声が聞こえる。

その口調振りから、どうやら見つかってないらしい。

ただ、このままのんびりしていると、降りてこられて、鉢合わせの可能性もある。

とりあえず、さっさと逃げるが一番……

「あ、都君見つけ」

と思いきや、不運にも見つかってしまった。

頭上には、もう満面の笑みを浮かべて僕の事を覗き込んでいる彼女の姿がある。

けれど、まだ、大丈夫だ。

とりあえず、すでに扉は目の前。

すぐに飛び出せば、捕獲と言う最悪の状態だけは免れる。

よし、飛び出せ、僕！！

「捕まえたっ」

けれど、それよりも、早く彼女が動いた。

なんと、はしごを使わず、飛び降りたのだ。

しかも、僕の上に。

「ぐへっ」

もちろん、僕はあっさりと潰される。

それと同時に顔にものすごい圧迫感を感じる。

けれど、それが何なのかは全く分からない。

ただ、目の前は憂鬱になりそうなほど、僕の嫌いな青だった。

莫迦みたい

「また、逃げられちゃった。」

あたしは、ため息混じりそうつぶやく。

もう既に、視界には、彼の姿はない。

いつも、そうだ。

あたしが近づくと彼は逃げる。

一緒に居る事すら嫌そうな顔をする。

まあ、ヴェロナのカフェロワイヤルを食べたのがいけないんだろう。

なんて、そんな事言ったところで、本当の事は分かっている。

彼は、あたしの事を好きじゃない。

だから、距離を置くのだ。

期待させないように。

あたしが傷ついたりしないように。

彼は、本当に変なところで優しい。

あまり優しい言葉とか投げかけたりしないし、冷たく切り捨てるよ

うな事を言う。

だけど、時々、ふと感じる。

彼の穏やかな優しさを。

彼も、それに気付いているんだろう。

そんなときはいつも皮肉気に笑う。

そんな彼を見て、あたしはいつも胸がしめつけられるようだった。

まるで、自分の事のように切なく思えた。

そして、あたしは彼にいつしか恋心を抱いていた。

目に追っている間に気がついたら、好きになっていた。

だから、何が何でも手に入れたかった。

彼を幸せにしてあげたかった。

もう、そんな笑みをさせたくなかった。

だけど、そんな気持ちとは裏腹に、彼をどんどん追い詰めていく。

彼を幸せにしたい。

そんな名目の下で、彼の全てを手に入れようとしている。

彼の気持ちなんて考えずに。

だから、時々思う。

ああ、なんてあたしはばかなんだろうと。

恋をしたら人はまともじゃなくなる。

友達は何そう言っていた。

あたしは、そんな世話半分に聞いていたけど、今になって理解できた。

理屈で行動が出来なくなる。

自分の今まで見た事ない一面を垣間見る事になる。

だから、あたしはばかなことをしてしまう。

止まらない。

止まらない。

止まるすべを知らないから。

止めるすべを知らないから。

こんな想いを抱いた事なんてない。

だから、あたしは、彼を追い続ける。

彼を求め続ける。

それは好きだから。

恋をしているから。

恋は下心。

相手の気持ちなんて関係ない。

あたしは、彼を手に入れる。

それが、今のあたしの生きる意味だから。

たった一つの約束

「で、お前ら、どこまで行っただ？」

今は、夕暮れの補習中。

けれど、教室内には、場に相応しくない言葉が流れた。

「菅原先生。とりあえず、そう言う事言うから、恋人に逃げられるんですよ」

だから、とりあえず、釘を刺しておく。

目下まじめに勉強中の真面目君に言うべき言葉ではない。

あ、真面目君がなんで補習なんてしているんだ。

そう思った人もいるだろう。

ちなみに、この補習は授業中話していたせい。

もちろん、話しかけてきたのはあの悪魔。

いつの間にか、僕の隣の席に陣取ると、ぺちやくちやと話しかけてきたのだ。

おかげで、それを見つかって、こんなざまなのだ。

しかも、諸悪の根源であるはずの悪魔は、その美貌で盟友を色仕掛

けで落として、帰宅だ。

どうやら、僕を待つと言う選択肢はなかったらしい。

まあ、待たれたからと言って一緒に帰る事なんてないけど。

わざわざ苦勞を背負って帰る人間なんて居ない。

さて、それはいいとして、問題をすらすらと解いていく。

悪魔みたいに優等生ではないが、それでも劣等生でもないので、苦もなく解ける。

とりあえず、目の前にいるナメクジ教諭は無視する事にする。

相手にしてたら、いつまで経っても終わらないし。

それに、ちょうどいいだろう。

自分自身を見つめなおすには。

「なあ、とりあえず、俺の相手をしてくれよお」

けれど、そんな事お構いなしに、ナメクジ教諭は僕に話しかける。

もう煩わしいっただらありやしない。

「とりあえず、これ以上騒ぐと塩をかけますよ、ナメクジ先生」

なので、一刀両断の下にする。

ペットのしつけはやっぱり厳しくないかね。

まあ、ナメクジがペットなんて嫌だけど。

うんうん。

目の前に居るナメクジ教諭はさらに落ち込んでるけど、気にしない。

めんどくさいし。

とりあえず、早く帰りたいし。

というわけで、さらさらと書いていく。

まあ、ところどころ適当だけど、気にしない。

今のこの状況なら、どうにでもなるだろう。

いくら我が盟友とは言え、時間の浪費を被るような状況になれば、切り捨てるしかないのだ。

ああ、なんて切ないものなのだろう。

「とりあえず、終了です。それいじゃあねえ」

そして、全て埋め終えると、どろどろになっているナメクジ教諭に提出して、さっさと帰る。

外に出ると既に、空は茜色に染まっている。

なんだか、それがものすごく切ない。

ああ、なんて僕は感受性が豊かなんだろうか。

もしかすると、芸術家向きなのかもしれない。

よし、とりあえず、明日から油絵でも描いてみよう。

題材は、やはり人目を引くものがいい。

というなら、やはり肖像画だろうか。

それで、肖像画でも美人画がいいだろう。

なんなら、裸婦画に挑戦してみるのもありかもしれない。

いや、けれど、そうになると、相手が難しい。

堂々と脱いでくれる人なんていない。

いや、一名いるか。

けれど、とりあえず、あれは却下だ。

その後何を要求されるか分かったものじゃない。

というか、そもそも、僕に芸術なんて向かない。

僕なんかは、平々凡々に生きていくことこそ、ぴったりののだ。

「ねえ、これから、どこに行く？やっぱ喫茶店？」

そんな事を悶々と考えていると、不意に空耳が聞こえた。

まるでお約束のようなタイミング。

「あ、それとも、もしかして、都君の部屋？きゃ、もう、大胆なんだから」

そして、さらにヒートアップする空耳。

とりあえず、警報がなっている。

けれど、悲しいかな、僕には逃げられない。

がっちりと腕を取られている。

これをされて、果たして逃げれるだろうか？

否、逃げられない。

それでも、一応フェミニン精神旺盛なのだ。

とりあえず、女性を傷つける事は出来ない。

今は亡き父上と母上としたたった一つの約束なのだ。

まあ、別に本当に死んでるわけじゃないけど。

それに、向こうに非があるときは別にかまわないうって言われてるし。

ただ、これは非はないんだろうな。

だから、どうする事も出来ない。

ああ、悲しい。

こうして、たった一つの約束にしばらくしてしまつ自分が本当に悲しい。

「でも、うん、あたしは、大丈夫だよ？心の準備だつて出来てるし。もういっそのことご両親に紹介してくれたつて全然かまわないから」

でも、とりあえず、この妄想悪魔をどうにかしないといけないだろう。

そうでもしないと、翌日には子供は何人欲しいかという話にまで発展しそうだから。

二人残されて

『ピクニックに行こう！！』

全てはその言葉から始まった。

隣を見て見る。

嬉しそうにしっかりと僕の腕を抱きしめている悪魔の姿がある。

そして、次に周りを見回してみる。

けれど、そこには、誰の姿もない。

あるのは、ごつごつとした岩の壁だけ。

とりあえず、今僕と悪魔は二人きり。

どうして、こんな事になってしまったんだろう。

まあ、雨が降り出して、ここに避難してきたんだけど。

とりあえず、そう言う事じゃない。

最初は、六人だった。

ピクニックに行こうという、突然の彼女の提案を最初は却下した。

だが、あまりにもしつこかったので、条件をつけて、六人で行くと

いうことだったはずだ。

二人きりだと貞操が危ない。

そう思ってたの事だった。

だけど、気がつく二人きりだった。

我が友瀬川と我が盟友の菅原教諭。

とりあえず、一番の友人のくせに、ようやく名前が登場だ。

そして、その二人の狙っている女性。

その四人が忽然と姿を消したのだ。

いや、もうここまで来れば、全て分かっている。

きつと、騙されたのだ。

はかれたのだ。

我が友達は裏切り、悪魔の牙城に落ちたのだろう。

とりあえず、条件はそれぞれの思い人と二人きりにさせると言う事だろう。

くそ、僕とした事がなんかつだったのだろう。

もう少し考えておけばよかった。

とりあえず、保険をかけていればよかったのだ。

偶数がいけなかったのだ。

奇数にしておけばこんな事態にはならなかった。

「ねえ、こんな薄暗いところに二人きりだときどきするよねえ」

そして、彼女はさらに身体を摺り寄せる。

おまけに、胸を腕に押し付けてくる。

どうやら、ここらへんで誘惑しておくつもりなのだろう。

これは困った。

とりあえず、色仕掛けに落ちるほど、愚かではないが、それでも貞操の危機には違いない。

いつ、押し倒されるか分かった物ではない。

男として生まれてきた以上、女に押し倒されるなんて屈辱でしかない。

それに、やはりこういう事はお互い好きで、合意の下でやるのが一番だ。

こんなのは、やはり正しくない。

よし、ここはとりあえず、

「雨止みそうもないから、急いで戻ろう?。」

この場所から退避するのが一番。

「ええ、でも、濡れるよ?風邪引いたら大変だし」

だけど、こちらの思惑なんて分かっているんだろう。

そう簡単にうんとは言わない。

「じゃあ、僕が一人で行くよ。これぐらいなら、多分大丈夫だし」

なら、一人で行けばいい。

とりあえず、彼女と二人きりじゃなければそれでいいのだ。

「う〜」

そして、そんな僕の答えに彼女はうなる。

とりあえず、このままでいられない事は彼女とて分かっているんだろう。

ピクニックと言えば山。

山となればとりあえず通信手段の内携帯は使えない。

電波がところどころ届かない。

よって、いつまでもいたら、遭難の可能性とてある。

「あたしも一緒に行くよ」

とりあえず、諦めてくれたらしい。

彼女は不承不承にそう言うと、立ち上がる。

どうにか、一応貞操の危機を乗り越えたらしい。

「ただ、あたし足が遅いから、手を握っててね」

まあ、まだしつこく食らい突いてくるが。

例えばそれは

窓の外を見る。

青い空が切なくなるほど綺麗。

とりあえず、今ではそれほど嫌いじゃなくなった。

まあ、雨の日だろうとどんな日だろうと、悪魔の攻撃は続くからだ。

諦めの境地と言ったところだろう。

この年で到達したくはなかった。

もう少し青い春を過ごしておきたかった。

とりあえず、愛しい思い人が出来るまでは。

けれど、やはり現実はどこまでも優しくない。

そっと牙を剥くのだ。

特に、僕のように平凡に生きたいと思う人間に限って。

それが世界の摂理。

アダムとイブが背負った現在の由縁。

けれど、僕は思う。

なぜ、僕達までもが罪を背負わなくてはならないのかと。

罰を下すならば、その本人達でかまわないはずだ。

なのに、なぜ!!

「黄昏姿の都君はそれはそれで素敵……ぼつ。」

そう、とりあえず、こんな状況にならない理由なんてないはずだ!!

視線を戻す。

悪魔の手先は、僕の膝に座りがつちりとしがみついている。

ほとんど寄生虫のような物だ。

おまけに、周りからは生暖かい目で見られている。

とりあえず、これは僕の趣味ではない。

こんな羞恥プレイなんて、全く持って好みじゃない。

むしろ、むつつりな僕は、二人きりの密室で、いろいろ……

て、何を言わせるか!?

むう、これが寄生虫の害毒なのか。

精神すら寄生するとは、なんとも恐ろしい。

とりあえず、殺虫剤はないだろうか。

とはいえ、期待なんて全くできないが。

きっと、そんなもので倒せるようなものなら、誰も苦勞しない。

きっと幸せなはずだ。

なのに、こうして、深い悲しみに、絶望にいると言つことはそう言う事なのだろう。

「なんだかんだ言つても、あつあつだな、都」

そして、さらに追い打ちをかける我が友。

ああ、どこにも仲間はいない。

助けは期待できない。

まさしく、四面楚歌。

例えば、それは、孤城に一人佇む、没落王家の主と言ったところだろうか。

て、意味がわからないか。

愛して愛して愛して

休日が、厄日に変わったそんな日の午後。

僕は、隣に悪魔を置いて、外出していた。

とりあえず、デートではない。

何があっても、それを認めるつもりはない。

目下のところは、誘拐と言ったところだ。

いきなり、僕の家に来てきたと思ったら。

「デートしょ？」

そう言って、嫌がる僕を無理やり連れ出したのだから。

しかも、我が家族は、そんな僕を助けるどころか、手を振って見送ったのだ。

なんとも、血も涙もない家族だろうか。

とりあえず、帰ったら、くさやをお土産に買って帰ろう。

しかも、それを最後まで処理し終わるまで、寝静まったところあいを見計らって、布団に忍ばせて置いてやる。

誰もが、そこまでやるかと思うかもしれないが、こういつときに躊

躊躇は無駄だ。

とりあえず、復讐は気が済むまでと言うのが、国際常識だ。

さて、復讐の画策はそれぐらいでいいとして、隣の悪魔との一時を乗り切るのが、目下のところの最優先事項だ。

とりあえず、隙を見せるわけには行かない。

隙を見せたら最後、婚姻届にサインをされるかもしれない。

だがしかし、

「ぬ、ぬあああ！！か、可愛い」

恐ろしく犯罪級に可愛らしいエンジェルを目の前にして、僕は崩れ落ちた。

だめだ。僕には、この可愛らしさには打ち勝てない。

可愛すぎる。

もう、とりあえず、根こそぎ奪い取られるほど可愛すぎる。

ああ、なんか、あの目が僕に

『私を愛して。ねえ、愛して、愛して』

そう訴えかけているようだ。

意識を朦朧と刺せながら、そつと手を伸ばす。

その愛くるしい瞳が、僕を誘惑する。

止められない。

後、もう少し。

そう、後もう少しで、手が届く。

けれど……

ガチ、という硬質な音が響き、儚くも虚しくショーウィンドウに阻まれる。

その事実が切ない。

このタイプドルの愛らしさと言ったら、犯罪級だったのに……

もし、触る事が出来たら、その日一日幸せだっただろうに。

ああ、なんて事だ。

とりあえず、全て悪魔のせいにしておこう。

「へえ、都君って、犬が好きなんだ。んじゃ、今度から犬のコスプレで攻めてみようかな」

……と思ったけど、やめて置こう。

しばらくの間は、この愛らしいトイプードルを眺めておこう。

きつと、しばらくしたら、犬が嫌いになってしまふと思っから。

大切なもの大切にしたいもの

ぼんやりと僕は手のひらに転がる物を眺めていた。

それは光を浴びると、きらきらと輝く。

目下のところ、今、僕の命の次に大事なものだ。

とりあえず、誰にも見せたくはない。

例え、それが僕の友だろうが盟友だろうが。

ふと、思い立って、周りを見回す。

けれど、僕の不安とは裏腹に、周りには誰も居ない。

ほっと一安心する。

だいたい、こういう時に限って、あの悪魔は出てくる。

あの神出鬼没さは恐ろしさを通り越して、ある種尊敬する。

とりあえず、僕の警報センサーに引っかからないわけだし。

それとも、あれだろうか。

某砂漠の何でも屋さんの小説のようにスケルトン仕様にでもしているのだろうか。

それを考えると、彼女の装備は恐ろしい。

ビームサーベルとビームライフル装備はもちろんの事。

対艦刀も装備しており、核エンジン搭載に、遠隔操作ビーム砲搭載。
拳銃の果てには、鎮魂曲なんて言う兵器やらをぶっ壊した流星って
言う兵器を装備可能。

そんなフル装備の上に、スケルトン仕様。

もうほとんど反則だ。

とりあえず、誰も倒せない。

というか、戦意喪失だ。

しかも、パイロットは第一世代で、種割れしてるし……

もうここまで来たら、人間じゃない。

とりあえず、あれだ。

神様だ。

運命計画を出した議長さんも勝てるわけがない。

全く恐ろしい。

と、話がずれてきているか。

とりあえず、僕は、その光り輝く物を握り締める。

こいつは、物凄く大切なもの。

何があっても、守りきらないといけない。

僕は、その場を飛び出す。

そして、駆け出した先は、購買部。

僕は、そこのおばちゃんに向かって……

「アンパンひと・・・」ありがとつ。彼女がお腹すかせてるのを見るに耐えて恵んでくれるのね」

言おうとしたその瞬間、その言葉をさえぎるようにして声が振りそそぐ。

振り返れば、そこには奴がいた。

あの悪魔のような笑顔を浮かべる奴。

奴は、僕の手から光り輝く僕の命の次に大切な物を奪い取る。

そして……

「メロンパン一つ」

絶望的な言葉を一つ。

そんな光景をまざまざと見ながらも、購買部のおばちゃんは、彼女にメロンパンを渡す。

僕はその場に崩れる。

終わった。

そう全ては終わった。

僕の手には何も残らなかった。

ただただ、絶望のみしか……

狙撃手

勝負は一瞬だ。

全てが一瞬で決まる。

僕は、息を止め、瞳を閉じる。

周りを満たす、ざわめきも聞こえない。

そして、目を開ける。

もう、僕の瞳には、何も写らない。

ライフルを構えなおす。

既に、準備は万端。

だから……

全てを解放する。

「さあ、来い!!」

それと同時に、そう叫ぶ。

途端に、数々の敵が縦横無尽にかけまわる。

僕は、それめがけて、弾を打ち込む。

そのたびに、ずしりとくる反動が、身体を満たす。

けれど、それがむしろ心地いい。

僕は、陶然としつつ、打ち込み続ける。

やがて、全ての敵が消える。

それと同時にちょうど弾切れ。

これで全てが終わった。

辺りには硝煙の焦げ臭い匂いで満ちる。

ライフルを置くと、打ち落としたであろう敵を見る。

……が

「どうやら、賭けはあたしの勝ちね」

背後から、悪魔の声が聞こえた。

そして、それと同時に、地面に転がる敵……

的を見る。

そこには、原形をとどめたままの的がほとんど置いてある。

つまり……

「さあ、デートに行きましょう、デートに!!」

僕の負けという事。

しかも、負けたので、今日一日は彼女のいいなりに……

やはりのせられてしまったのだろう。

だいたい、的を全部打ち落とせるはずがないのだ。

そんなの僕にだって分かっている。

なのに……

なのに、僕は、全部倒したら解放してくれるって言う、甘言に騙されるなんて。

ああ、今でも悔やまれる!!

「えへへ。とりあえず、今日は朝帰りかなあ。両親にはなんて誤魔化しとこうかなあ」

許した覚えなどない

学校からの帰り道の途中、ある店の前を通った。

かつて、僕が生き恥を晴らした店。

言わずと知れた、至高のスイーツ店。

そうヴェロナだ。

そして、思い返す、あの絶望の瞬間。

あの瞬間、僕は天国から地獄へとまっさかさまとなった。

「もしかして、まだ、あの時の事怒ってる？」

不意に、隣から話しかけられた。

とはいえ、隣にいるのは、もちろんあの悪魔。

そして、その悪魔が言う『あの時の事』とは、もちろん……

「当然。誰が許すものか。末代までたたてくれる」

カフェロワイヤルを奪った事だ。

あの事は、何があっても許さない。

誰が許してやるものか。

「あはは、ごめんね？そのお詫びと言ったら、なんだけど……はい」

そんな中、彼女はそう言っつて、僕に包みを手渡す。

それは、ヴェロナの包装紙にくるまれている。

僕は、それを受け取り、中身を見る。

けれど、それと同時に驚きが隠せなかった。

なんとそこには

「これって、カフェロワイヤル〜愛の賛歌〜？」

そうそれがちょこんと置いてあった。

「うん。悪い事したと思ったから、許して欲しくて。でも、普通のじゃだめかな、と思ったから」

そんな僕の問いかけに彼女は気まずそうに答える。

『カフェロワイヤル〜愛の賛歌〜』

これは、ヴェロナにおける至高の中でも至高の一品。

年間限定生産数一という、完全に分けの分らない物なのだ。

けれど、その分、その味は、一口食べただけで、天国に行けるという。

まさしく、至高の中の至高なスイーツなのだ。

「けど、どうやって、これを手に入れたんだ？」

だけど、気になるのは、これの入手方法。

これは、完全に限定販売。

しかも、既に販売は終わっている。

「えっと、そのお願いしたの。そしたら、作ってくれたの」

そんな僕の疑問に、答えると、てへりと笑う。

背筋が一気に冷える。

なんと言っ事だ。

彼女は、色仕掛けでこれを手に入れたのだ。

なんと、おぞましい事を。

なんと、罪深き事を。

これでは、真面目に手に入れようとしている人達に失礼ではないか。

「僕は……僕は、こんな事をしてもらっても、嬉しくない!!」

僕は、今にも泣き出しそうな声で、彼女に詰め寄る。

とりあえず、謝らせなければ。

世界中の全ての人に。

「とかいいつつ、しっかりと食べてる」

と思うのもつかの間、彼女の一声で我に変える。

そして、自分の手を見る。

そこには、しっかりとかけている愛の賛歌が握られている。

なんていう事だ。

僕はなんて事をしてしまったんだ。

僕も、ついにこの手を汚す事になってしまつとは。

「これで、共犯者だね。でも、あたしは都君といられるならどこだっていいかな。例え、監獄の中だって」

けれど、彼女はそんな僕の苦悩に気付かず、頭の中を桃色にしている。

僕は、その場に崩れ落ちる。

そして、絶望。

「うん、まずは、その前に、二人の愛を確かめ合わないかね。とり

あえず、ホテルに」

「なんでそうなる！！」

する暇は、どうやらないようだ。

と言つか、僕はまだ身体を許したつもりはありません。

このくらい常識でしょう？

まぶしい光で、僕は目を覚ました。

時計を見ると、時刻は昼過ぎ。

どうやら、休みだからと言って、かなり寝すぎていたみたいだ。

まあ、日ごろ追いかけてまわされているため、かなり疲れているんだろう。

それを考えるとこれは当然なのかもしれない。

僕はため息を吐きつつ、布団から起きると、下に降りる。

一応、何か腹に入れて置かないと、もたない。

とりあえず、適当に何か作ろう。

キッチンに立って、適当に食材を選び、手際よく切り刻んでいく。

とりあえず、それなりに料理は出来る。

それこそ、自炊できる程度には。

ただ、どっかの主夫なハーフェンジェル君には及ばないけど。

あの子は、ダメだ。

とりあえず、レベルが違う。

というか、キャラが違う。

「ねえ、あたしは、何をすればいいの？」

と、不意に横から声が聞こえた。

どうやら、手伝ってくれるらしい。

なんと、心優しい人だろう。

「んじゃ、とりあえず、冷蔵庫に昨日の残り物があつたから、それをレンジで暖めとして」

その優しさはしっかりと受け取って置くべきだろう。

僕は、その声の主に、指示を出すと、ささつといためる。

まあ、とりあえず、食べればそれでいい。

晚になれば、母上がきつと美味しい物を作ってくれる。

——ん、ちょっと待て。

そついや、この家に誰かいたか？

とりあえず、家族は全員外出。

僕だけしかないはず。

んじゃあ、さっきのは誰？

いや、こんな状況で出てくるのはきっと、あれだろう。

うん、お約束って奴だ。

そろりそろりと、振り向く。

そこには、ご機嫌に準備している悪魔の姿。

ジーザスー！

とりあえず、ムンクの叫び風の顔をする。

やはり、どこまでも、これはお約束らしい。

そもそも、どうやって、ここに入って……

て、どうせ、あれだろう。

残酷な家族のせいだろう。

なので、気にしたところで、無意味だ。

とりあえず、作った料理を全部並べると、席に座って、食べる。

「なんだか、こうしてると新婚さんみたいだね」

脳が沸いたような事を言っているけど、それも無視。

「都君のパジャマ姿って可愛いなあ……じゅるう」

ひっ！？

そんな中、もくもくと食べていたら、そんな事を言い出した。

思わず声が出そうになったけど、それもこらえて無視。

とりあえず、一瞬貞操の危機を感じたけど、無視。

無視と言ったら、無視。

「ごちそう様でした」

「はい、お粗末さまでした」

あわただしく食事を終えて、さつさと食器を片付ける。

その際に、余計な言葉を聞いたような気がする。

でも、とりあえず、それも無視だ。

水道の蛇口をひねって、水を出す。

一応、使った食器を洗っておく。

じゃないと、帰った時に、母上が小うるさい事間違いない。

けれど、このまま洗い物をする、汚れる可能性がある。

なので、エプロンをかける。

しゃかしゃかとスポンジで磨いて、水洗いする。

そして、全部終わり、いざ逃げようそう思ったところで

「都君のエプロン姿萌え……はぁはぁ」

「ひい!？」

後ろから抱きしめられた。

しかも、吐息を首筋に吐きかけられる。

ただ、言っている事は、完全に変態おやぢのそれと変わらない。

「もう、我慢できない」

拳句の果てには、そう言い出すと、僕のパジャマのシャツをめくると、素肌に撫でてくる。

「ちょ、ちょっと!! キッチンで何をするつもりさ!!」

もうここまで来たら無視なんかしてられない。

とりあえず、何が何でも貞操を守りきらないと。

「そんなの決まってるじゃない。愛を確かめ合っの」

けれど、彼女はがっちりと僕を抱きしめると、撫でまわす。

その触り方に悪寒が走って、今すぐにでも、振りほどきたいのに力が入らない。

その触り方が気持ち悪すぎるせいだろう。

「こ、こんなところで、やる人がいるか!？」

それでも、なんとか反論する。

とりあえず、こんなところで、悪魔とそんな関係になるなんて、死んでもごめんだ。

「大丈夫。こんなの常識よ、常識。あたしの友達だって、前されたって言うてたし」

だけど、そんな事で止まるような悪魔ではない。

撫でまわす手がせわしくなる。

それにあわせて、息使いもどんどん荒くなる。

もう、完璧に変態だ。

性犯罪者だ。

僕は、力の入らない身体で、なんとか、彼女の手を取る。

とりあえず、この場合は背に腹変えられない。

「あのね、僕、初めては、自分の部屋だって決めてるんだ。」

とりあえず、ちよっぴり甘え声で、そう言ってみる。

もし、彼女が僕の事を好きだと言つのなら、この言葉を聞いてくれるはず……

「そんな事言つて、逃げるつもりでしょ？それに、あたし、もう我慢できないから、やだ」

だけど、そんな僕の願いは、無情にも、却下される。

というか、なんと言う女だろう。

ここまでも、欲望に忠実と言つか……

羞恥心のなさは。

とりあえず、ここはしかたがない。

最終手段だ。

彼女の腕を再度取り、関節を極める。

非力な僕に唯一できる芸当。

そして、それで彼女が一瞬ひるんだのを確認すると、勢いよくその場から逃げ出した。

このくらい常識でしょう？（後書き）

とりあえず、主夫なハーフェンジェル君とは別の小説に出てくる子
です。

意味のない鍵

いきなりだが、僕の部屋には鍵が二つある。

一つは最初から付いていた鍵。

とりあえず、昔はそれでよかった。

それ以前に、鍵を閉めるような事はなかった。

ただ、悪魔が僕の周りをうろつきはじめた頃から、自己防衛手段のためにかけるようにした。

けれど、それもあっさりとマイナスドライバーで開錠された。

まあ、所詮は一軒家の部屋鍵。

そんなものだろう。

なので、僕はわざわざかんぬきを買ってきて、それを部屋に装着させている。

何を嚴重に言った感じだろうが、僕だってできることならそんな事はしたくない。

ただ、しなければ、僕の貞操が危険なのだ。

あの忌まわしき、キッチンでの出来事以来悪魔はなりふりかまわなくなってきた。

休み時間中は常に僕の膝の上。

それを僕が嫌がろうとすると、泣いて、僕を非難する。

途端に、周りからひんしゆく嵐。

そして、二人きりになるや否や、僕の制服を脱がそうとする。

とりあえず、音楽室と保健室と屋上、そして教室でそれをされた。

けれど、それは別に学校で限った事ではない。

とりあえず、公園に入ったら、茂みの中に引きずり込まれそうになる。

普通に商店街を歩いていたら、路地裏に引きずり込まれそうになる。

もう、ほとんどしている事が、性犯罪者と変わらない。

今すぐにでも、できる事なら、警察に引き渡したいが、そんな事しようものなら、きつと僕が捕まる。

やはり、どこまでも、世間様は美少女の味方なんだ。

と、それはいいとして、そんなわけで、あの悪魔は僕の身体を奪おうと画策している。

そして、それは、この部屋でも同じ。

以前は、この部屋の鍵を開けると、すやすや眠る僕のパジャマを脱がしていたのだ。

すんでのところで起きていなかったら、完璧に既成事実を作られていた。

そんなわけで、かんぬきを付けて、完全防衛手段を取っている。

だから、とりあえず貞操は安全なのだ。

いや、安全だと思っていた。

今、目の前で起こっている事に、気が付くまでには。

「さあ、めくるめくる快樂の世界へ！！」

上下下着だけの悪魔が、僕のパジャマを完全に剥ぎ取っている事に気が付くまでは。

今時デジタルじゃないなんて

大佐、ただいま本官は、危機に面しております!!

とりあえず、無事生き残れるかどうか分からない。

そんな瀬戸際にあります!!

なので、とりあえず、至急増援を求む!!

「今日はね、とりあえず、二人きりだから、何でもし放題なの。それこそ・・・もう言葉では言い表せないほどの事だって……じゅう」

けれど、その思いもあっさりと崩れ去る。

とりあえず、誰も居ない。

と言う事は、この彼女の暴走を止める事は誰にも出来ない。

そういう事なのだろう。

おまけに、なんていう事だろうか。

携帯電話の電波は繋がらない。

とりあえず、元電・公社発の携帯さんは、圏外を示している。

いや、単にこの家が圏外圏にいるだけなのだろう。

なのだろう……

まあ、でかいし。

無駄にでかいし。

塀の端と端が見えないほどだし。

どっかのお城みたいな家だし。

だから、圏外になったってしかたない。

仕方ないんだ。

たぶん、何かの妨害電波が出てるわけじゃない。

目の前にある電話だって、なぜかプッシュ式じゃないし。

とりあえずダイヤル式みたいだし。

きつと、この家全体がアナログなんだ。

とりあえず、この時代にデジタルじゃないなんてありえないけど、きつとそうなんだ。

ここのご主人はきつと古きよき時代を愛しちゃっている人なんだ。

玄関に年季を感じさせる大きな置き時計があつたし。

というか、むしろそうであれ。

じゃないと、許さない。

「んじゃ、さっそく、手を縛って……」

現に、彼女だってアナログ的に、普通の麻縄で後ろ手を縛って居るじゃないか。

て、ちょっと、待てえ！！

「やめんかあ！！」

とりあえず、そんなプレイはお断り。

「えー、でも、そうしないと、嫌がるじゃない。だから、ほら、必要でしょ？」

けれど、それでも諦めない彼女は、更に縛ろうとする。

しかし、なんとしても、僕としては貞操は守りたい。

もうここまで来ると意地だ。

何が何でも彼女の好きになんてさせない。

とりあえず、麻縄を奪い取ると、彼女の手を縛り、あまつた部分でベッドに縛り付ける。

「いやん、実は、都君でこういうプレイが好きなの？うん、別にあたしはそれでもいいよ。愛があれば」

途端に、顔を赤らめ、さらには身体全体をもじもじとさせる。

とりあえず、その姿はかなりおぞましい。

見なかった事にしたい。

というよりも、はっきり言わせて貰えば、僕にそんな趣味はない。

ただ、言った所で無意味だろうから、無視。

さつさと、済ませてしまふのがいいだろう。

とりあえず、彼女のたんすの中をあさる。

「も、もしかして、あたしの下着を見るの！？そっちの方に興味が！？そ、それなら、いつだって見せてあげるし、なんなら、脱ぎたてを……むがつ！？」

けれど、その際とりあえず、放送禁止すれすれの言葉連発のため、黙らせる。

まあ、目的の物が見つかったから、というのもあるが。

その目的の物と言うのが、タオル。

とりあえず、煩いので、猿ぐつわと目隠しの変わりにしておく。

その途端に

「ふがふがふがふがあああ!!」

また、何か言い出したが、どうせ……

『都君てかなりのどSなのね。でも、あたし、そんな荒々しいのって大好き!!』

とか言っているんだろう。

ホントに、最近とみに思うが、これが大和撫子と言っているのだろうか？

とりあえず、ただの変態としか思えない。

まあ、見目だけはやたらといいが。

と、それはいいとして、さっさと退散しておこう。

一応、ダイヤルを回して、内線で連絡をしておく。

まあ、死なれたら困るし。

とりあえず、執事とやらがいるだろう。

これだけ、でかい家なら。

わたしを見て

夕暮れの黄昏時。

僕は、窓の外を眺めていた。

とりあえず、なんとか今も貞操は守りきっている。

いつもいつも、済んでのところで、守りきっている。

どうやら、僕と言う人間は逆境やらピンチには強い人種のような。

とりあえず、二死満塁バッター四番で一発さよならのピンチの場面に出たら、きっと活躍するんだろう。

ということは、完全無欠の鉄壁のクローザーと言う事か。

虎のJFKやアヒルのYFKなんて怖いものじゃないな。

とりあえず、大魔神二号と言ったところか。

どんな場面でも抑えてみせる。

「なあ、最近俺の出番ってないよな。頼むから出してくれよあ。なあ」

「悪いが、貴様のような、外道は知らん」

とりあえず、リビングデットが現れたが、一刀両断にする。

まあ、一部の慈悲とて見せるのがもったいない。

「そ、そんなあ！！なんだよ、俺たち、あんなに愛し合ったじゃないか！！あの美しい日々は幻想だとしても言うつもりか！？」

けれど、なおもしつこく食らいつくりビングデット。

かなりレベルが高いらしい。

「知らん。興味ない。とりあえず、消えろ」

ならば、一撃必殺の技を繰り出す。

これならば、致死のはずだ。

「ひ、ひでえ！！頼むから、俺を見てくださいよ。頼むから昔みたいに見てくださいよ！！」

しかし、それでも、倒れない。

なんと言っ執着心だろう。

これはかなりのレベルだ。

どうしたものか？

いや、ここは、一気に勝負を着けたほうがいいだろう。

とりあえず召喚魔法だ。

かなりのリスクが伴うが、そんな事も言ってもらえない。

「いやあああ！！都の貞操が奪われるう！！」

しなを作つて、詠唱を唱える。

「都君の貞操はあたしのものよ！！」

途端に、それに反応するように現れる一つの人影。

言わずと知れた悪魔の化身。

「誅殺！！」

そして、彼女は一撃のもとに、リビングデットを切り捨てる。

さすがは、最強の召喚獣だ。

「さあ、これで邪魔者はいなくなつたわ。今こそ、二人でめくりめくる快樂の日々を！！」

けれど、だからと言って油断はしてられない。

代償を取ろうとするのだから。

とはいえ、こちらとて、それは予想済み。

悪魔がリビングデットを討ち取っている間にこっちは逃げる準備は整えていた。

なので、

「さくらば……」

颯爽と、教室を去ったのだった。

転んだ先の杖

「今日こそは、今日こそは一つに!」

「なるかあ!」

そんな至極日常的な会話を繰り返しつつ、僕は逃げていた。

こんな日常的な会話なんて、かなり嫌だけど、もう慣れた。

それに慣れるのも嫌だけど、もう諦めた。

やっぱり人間諦めが大事だ。

とはいえ、だからと言って、人身御供になるつもりは毛頭ないけど。

とりあえず、好きでもない人とはそう言う事は出来ません。

もう少し、男心と言う物を勉強して欲しいものだ。

誰でもいいって分けじゃないし。

それにそれに、やっぱり初めてのときなんかは、お互い緊張しちゃって。

『い、いい?』

なんて、声をどもらせたりとかして、初々しくないと。

その時に、恥ずかしげで、だけどちょっとはにかむように

『うん、うん』

そう言う受け答えがいいんだ。

もう、なんというか、甘酸っぱさ100%なのがいいんだ。

あんな、もう獣同士の交尾みたいなものは即刻お断りだ。

まあ、極論で言えば、所詮は生殖行為なのだから、それはそれでありなんだろうけど、僕としてはとりあえずやだ。

何が何でもやだ。

やっぱり、男はロマンチストじゃないとー！

と、それはいいとして、校門を出ると、すぐそばに隠して置いた自転車に乗り込む。

とりあえず、最近、彼女はもう有無を言わせないと言うか、やりた
い放題なのだ。

なので、とりあえず、これぐらいやっておかないと、すぐに捕まる。

男子高校生平均並みの僕。

女子高校生平均以上の彼女。

それでも、僕の方がまだ上なんだけど、周りが邪魔するから、あつ

さりと捕まってしまう。

なので、そのためにも、自転車が必要なのだ。

とりあえず、備えあれば憂いなし。

転んだ先の杖と言う奴だ。

これなら、確実に逃げ切れる。

ぶんぶん言わせて、走り抜ける。

そして、商店街を抜けきり、後もう少しで家だ。

そう思ったところで、いきなり黒塗りのベンツ。

しかも、リムジン仕様。

それが目の前に止まると

「捕まえました」

そう言つて、悪魔が出てきた。

備えあれば憂いなし。

転んだ先の杖。

その事とは、どうやら、彼女の事だったようだ。

ぐ
す
ん
。

青い惑星

僕達は宇宙船の中に居た。

寿命を終えた星から、半ば追い出されるようにして、僕達は宇宙へと出た。

とてもとても綺麗だった星。

緑で囲まれた生命の星。

僕達はそこで生まれ、そして育った。

だけど、今僕達は、そんな鳥かごから追いやられ、旅を迫られている。

今、この宇宙船に居るのは二人だけ。

宇宙船に乗った時は、もっとたくさんいた。

だけど、悲しみにくれた仲間達は、自決をした。

はたまた、新種のウイルスにやられた仲間も居た。

そんな中、僕達二人だけは、なんとか生き残った。

一時は、彼女も新種のウイルスにやられて、死にかけた。

だけど、奇跡的にも彼女は回復した。

その時は、思わず愛の奇跡だなんて、陳腐な想いが浮かんだ。

そして、そんな奇跡の中、僕達は広く果ての見えぬ世界を歩き続ける。

二人きり。

それが、寂しい時もあった。

仲間がどんどん死んでいくのに、直面しては、二人して泣いた。

だけど、それでも、僕達は耐えられた。

そこには、愛しい人の姿があったから。

もしあの時、彼女が助からなかったら、僕も一緒に死を選んでいただろう。

もう、僕は彼女なしでは生きていられない。

彼女なしでは、僕を語れないから。

「ねえ、あたし達は、これから、どうなるのかな？」

彼女は、僕の背中にしがみつき、頬擦りしながら問う。

その声は、悲しみに帯びている。

「きっと、僕達は、この手に幸せを掴むさ。僕達の背中には、死んで

いった仲間の魂を背負っている。幸せにならなくちゃいけない義務があるんだ」

そんな彼女を、愛しく思い、そつと振り向き抱きしめる。

僕は、何があっても彼女を守る。

僕は男だから。

男だから、何があっても彼女を守らなくちゃいけない。

例え、この身が地獄の業火に焼かれようとも。

「そつだよね。うん、ごめんね。また心配かけちゃった」

そんな僕の想いが彼女にも伝わったのだろう。

抱きしめる力を強める。

僕も、やはりそんな彼女が愛しい。

僕を信じてくれる彼女がたまらなく愛しい。

視線の先を変え、ガラス越しに見える宇宙を見る。

星々の瞬きが混沌とした闇を照らす。

ふと、その星の輝きに目を追っていると、一つの惑星が目がいった。

自分の星とは違い、青の惑星。

だけど、今まで見て来たものとはどこか違う。

優しい青をした惑星。

「ちょっと、ごめんね」

僕は、そう言うと、彼女の手を優しく振り解き、コンソールパネルをいじって探索機を飛ばす。

「どうかしたの？」

そんな僕の姿を見て、彼女は訝しげに、席に座る僕のくびに手を回し、パネルを覗きこむ。

その声の調子はどこか期待している。

「もしかすると、居住可能惑星かもしれない」

もちろん、僕としては、彼女の期待に応えてあげたい。

けれど、だからと言って、両手で喜びをあらわにするわけにも行かない。

もしかすると、すめない可能性だってある。

そんな事になれば、きっと彼女はひどく落ち込むだろう。

だから、こんな時こそ、落ち着かないといけない。

しばらく待つと探索結果が出た。

その結果は……

『第一級居住可能惑星』

それは、僕達にとっては願ってもない事だった。

第一級。

それは、僕達が住んでいた星と同レベルの惑星。

それはつまり、この旅が終わりを示した証。

「ねえ、あたしたち、もう歩き続けなくてもいいんだね？」

彼女が、その結果を見て涙をこぼしつつ、僕にしがみつく。

「ああ、もう全てが終わったんだ。僕達はこれから幸せになれる」

その思いに答えるように、僕は彼女を抱きしめる。

そして、そつと彼女のあごに手を添える。

その意味に彼女も気付いたのだろう。

涙をふき取り、目を閉じる。

それが合図。

「結奈、愛してるよ」

僕は、そのまま彼女との距離をゼロに……

「ぎゃあああああ!」

その瞬間で僕は目を覚ました。

身体中はまだ完全に鳥肌が立っている。

それもこれもあの悪夢のせいだ。

何が……

『結奈、愛しているよ』

だ。

間違えても、誰が言っかって言う台詞だ。

なんで、僕があのお悪魔と二人きりで宇宙船で旅しないとイケないんだ。

しかも、僕があのお悪魔なしでは語れない存在？

そんなの冗談じゃなさ過ぎる。

とりあえず、あの悪魔なんて必要ない。

ああ、もう気持ち悪すぎる。

だいたい、あんなところで一人きりなんて、絶対食われてしまうんじゃないか。

本当に、最悪な夢だった。

いったい、どうして、あんな夢なんて見てしまったんだろう。

身体を起こし、周りを見まわす。

授業中に寝てしまったから、教室。

とりあえず、大声を出したけど、休み時間だったみたいだから気にしない。

まあ、あんな悪夢を見た原因は授業中に寝てしまった僕が悪いんだろう。

一種の罰なんだろう。

とりあえず、背中にへばりついて、僕の身体中を舐めまわすようになでている悪魔のせいなんかじゃないはずだ。

とけてゆく

「よし、いけ、いけ、いけえええ!!」

大声を上げての応援。

ただいま、僕は、絶賛応援中です。

なので、邪魔しないでください。

「よし、いったあ!!それでこそ、漢だあ!!」

そして、僕の応援甲斐あって、男を見せてくれた。

とりあえず、これで僕の賭けは勝ちだろう。

くくく。

隣では悔しそうにしている友の姿がある。

とりあえず、登場が少ないとこやくので、登場させてあげようと思
い、賭けに誘ったのだ。

もちろん、数少ない機会なのだ。

友は、喜んで、二つ返事をした。

それを罨とは知らずに。

とりあえず、この僕が最初から負けると分かっている賭けなんてしない。

なので、確実に、僕が勝利の美酒に酔う事は決まっている。

そして、遠くで、ゲームセットと声高々に叫ぶ主審の声。

もちろん、賭けは僕の勝ち。

今回の賭けは、野球部の練習試合でどちらが勝つかと言つもの。

我が野球部は甲子園常連校で、それなりに名が通っている。

そして、相手の高校はほとんど名の知られてない高校。

そこで、僕は賭けを申し出たのだ。

もちろん、僕が賭けたのは、相手高校の勝ち。

つまり、我が野球部の負けだ。

そして、その予想通りに負けた。

最後の最後にさよならで。

しかも、スコアは1 - 0で。

もちろん、以前対戦した時は、負けていた。

だけど、その時には、賭けていたものがあつたのだ。

それは四番だった。

ちょうど、そのとき、怪我をして、出場できなかった。

その結果、引き分けのままでもつれこみ、投手のスタミナが切れ、失投を運良く、スタンドに放り込めただけの事。

それがなければ、負けていた。

けれど、それを知らず、ただ、一度やって勝った事しかしらず、おまけに自分の高校は強いと思っている、このおばかさんはあっさりと向こうにかけた。

おかげで、かなりの額をもつけさせてもらった。

「ちくしょう、ほらよー!!」

友は、自分の負けに腹を立てながらも、僕に約束どおりに賭けの負け分を渡す。

いや、実に愉快痛快だ。

とりあえず、これではらくは、美味しい物が食べられる。

いや、まさしく、これからめくるめくる夢の日々が過ぎるのだらう。

まあ、とりあえず一日二日だらうけど。

さて、さっさと帰ろう。

とりあえず、これを隠し金庫にのけておかないと……

「へえ、賭けで勝ったんだ。んじゃ、そのお金でデートに行こう」

そんな矢先、また捕まった。

またお約束だ。

本当にお約束だ。

まるで、はかったかのように僕の手を抱きしめ、そんな事をのたまう。

とりあえず、あんな豪邸を持っているんだから、僕にたからなくてもいいと思うんだけど。

思うんだけど、きっとどうしようもないんだろうな。

とりあえず、僕の夢はツユと消えて、とけていっちゃうんだろう。

ドアの向こう

僕は、ただいま保健室にいる。

その原因を作ったのは、もちろんあの悪魔。

いきなり、襲いかかってきたから、ひょいと避けたのだ。

すると、いきなり

『都君が捨てたあ！！あたしの身体の隅々まで味わうだけ味わって捨てたあ！！』

そんな事を大声で叫びだしたのだ。

しかも、女優さながら涙をこぼして。

当然、それを見た彼女に毒された野朗どもは目の色を変えて、突撃をかけてきたのだ。

もちろん、なんとかそれは回避したけど、その途中で、軽く足を捻ってしまったのだ。

だから、こうして今保健室で治療している。

もちろん、部屋の中には、僕と保健医の先生と二人きり。

もし、こんな手負い状況であの悪魔といふものならあつという間に貞操を奪われてしまいかねない。

とりあえず、まともに走れないし。

「はい、終わり」

シップをはり、包帯で固定し終わると、彼女はそう言う。

彼女のおかげで少しは楽になった。

ホント、さすがは保健医様様だ。

ちなみに、保健医の彼女は、若い。

しかも、割と可愛い。

なので、割ともてる。

よって、これはこれで嫉妬の対象になるかもしれないが、まあ、別にいい。

どうせ、今とたいして変わりはないだろうし。

それを考えると本当に平穏とは無縁な僕の生活だ。

「ありがとうございました」

僕は、彼女にそう礼を言つと、立ち上がる。

とりあえず、今日はさっさと帰らせて貰おう。

こんな状況で、彼女と無事に渡り合える自信はない。

まずは保身が第一だしね。

立ち上がると、扉に手をかける。

とりあえず、まずは、ここから出なくちゃいけない。

その後は、教室に帰り、カバンをとらなくちゃ。

そして、僕は、扉を開けた。

否、あけようとした。

けれど、それよりも早く。

ガンガン、と思いつき扉を叩く音。

そして

「都君。そこにいるのは分かってるの。早く、そこから出ないとその年増の女に純潔を奪われちゃうわよ!」

そう叫ぶ声が聞こえる。

とりあえず、状況が分かった。

僕は、鍵を閉める。

彼女がいきなり入ってこなかったのは正直助かった。

まあ、とりあえずそれだけの常識はあるのだろっ。

こんな時だけ、常識ぶってもしかたないような気がするがそれは置いておく。

とりあえず、逃げ出す準備をしないと。

今の防御壁は扉一枚だけ。

ドアの向こうには、舌なめずりしている獣の姿がある。

「行儀悪いですけど、ここから失礼します」

なので、こうするしかないだろう。

一応、彼女に謝っておいて、窓から外に出る。

保健室が一階で助かった。

とりあえず、このまま帰ってしまおう。

好きじゃない。嫌いじゃ、ないけど

「なあ、お前、結局のところ、竹原の事をどう思ってるんだ？」

不意にいきなり何の脈絡もなく馬鹿みたいに唐突に我が盟友が問いかけてきた。

「いや、そこまで、けなさなくてもいいんじゃないのか？」

そんなこと思っていると、内心を読んだのだろっ、寂しげにそう続ける。

まあ、あれだ、可哀想な人だ。

「うっさいわ！！とりあえず、俺の問いに答えろ！！」

おまけに逆ギレだし。

ホント可哀想な人だ。

とりあえず、今度誰かを紹介してあげるのもいいだろう。

「別に興味ないですよ」

それはいいとして、さっさと答えてあげる。

いつまでも、からかっているのも可哀想だし。

「興味ないって、お前なあ」

そんな僕の答えを聞いて彼は呆れ顔になる。

けれど、こちらとしてもしかたがない。

あんな変態に興味なんてもてない。

まあ、どういう構造になっているのか知りたいというのはあるにはあるが、わが身を犠牲にまではしたくない。

「んじゃ、嫌いなのか？」

だけど、それを嫌っていると取ったらしく、そう尋ねる。

確かに興味はない。

でも、だからと言って。

「別に嫌いじゃないですよ。好きでもないですけど」

そういうわけではない。

どっちでもないという事。

つまるところ、どうでもいい人って感じなのだろうか。

「そんなものかねえ」

それを聞いた彼は、再度呆れ顔で頷く。

まあ、その気持ちも分からないでもない。

見た目は極上なのだ。

そんな思いになっても仕方ない。

でも、別に僕の中ではさほど見た目は重要じゃない。

まあ、好きになるのに、容姿は十分必要になるが、やはり性格が合わない。

とりあえず、あの壊れた変態は嫌だし。

「そんなもんですよ」

彼のつぶやきに、頷き、僕は、窓の外に広がる夕焼け空をぼんやりと眺めた。

眼を覚ましてよ

「さあ、いざめくりめくる快樂の日々へと旅立たん!!」

「甘い、必殺役立たず出演少なし友シールド!!」

いつもどおりに、突撃を仕掛けてくる悪魔。

その攻撃に幾分慣れてきた今日この頃。

そんなわけで、とりあえず、すぐそばにいた役立たずの友人をにえにする。

とはいえ、ものの役に立たない友だ。

あっさり、やられるだろう。

「邪魔!!というか、あたしの都君のそばに寄らないでって言うか、消えちゃって!!」

ほら、やっぱり。

思いつきり、顔面に拳を打ち込まれているし。

というか、あのいいかたはかなりひどいと思うけど。

いくら、我が友が役立たずで、出演が少なくても、存在価値ぐらいはあるはずだ。

まあ、だからと言って、助けてやる価値があるとは思えないけど。

今近寄れば、確実にあの悪魔が襲ってくるだろうし。

なので、窓の外へと捨てられているが、助けられない。

とりあえず、頑張って生きてくれ。

お前の犠牲は無駄にしない。

僕は、心で泣きながら、教室から飛び出す。

後ろから、慌てて追いかけてくる彼女の姿がある。

とりあえず、なんとしてでも、まかないと。

僕はいつきにギアチェンジして、さらに距離を広げる。

何が何でも安全圏を確保しないと。

すばやく、階段を駆け下りると、外へと飛び出し、木々の間に姿を隠しつつ、逃げる。

そして、周りを見回す。

そこには、あの悪魔の姿はない。

とりあえず、どうにかまけるにはまけたらしい。

ほっと一息をつく。

「うう、都……」

けれど、不意に声がした。

慌ててさらに周りを見回す。

だけど、そこには誰の姿もない。

どうやら、空耳……

「……下だ」

では、ないらしい。

とりあえず、声の通りに下を見る。

すると、なんと、僕の足元には友が転がっていた。

どうやら、落とされた後、ここまでなんとか張ってきたのだろう。

「悪い悪い」

僕は、彼の上から降りる。

とりあえず、可哀想だし。

「……お前絶対わざと——」

偶然とはいえ、落ちた後に踏み潰されるなんて、可哀想過ぎるよね。

ぐりぐり

「…………ぐああああ!!」

「お、おい、大丈夫か!!」

しかし、なんと不運が続くのだろう。

いきなり、彼は思いっきり叫びだした。

「…………大丈夫なわけないだろう」

けれど、僕の願いは虚しく砕け散り、彼は静かにそう言つと眠る。

彼の身体にはもう力が入っていない。

だらりと、崩れ去る。

「…………そ、そんな…………冗談だろう?おい、起きろよ。起きろよ!!」

だけど、僕にはそんなこと認められない。

死ぬなんて嫌だ。

嫌なんだ!!

「死ぬなああああ!!」

そして、僕はそう叫んだ。

気に食わない

「今、俺は猛烈に怒っている」

「なんだ、もてないのはしかたないだろう？」

唐突に、我が友は怒気を隠さず、そう言った。

とはいえ、僕としては、そんな事を言われても困るのだ。

やはり、もてないのは、仕方ないし。

「違うわ！―いつもいつも、お前にしこたまやられる事だ！―」

と思っていたら、違ったらしい。

「おいおい、被害妄想は恥ずかしいぞ？僕がいつ何をしたと言っただ？」

とは言っても、僕には、何も後ろ暗い事はない。

とりあえず、僕は日々真面目に生きてるし。

「ふざけんじゃねえ！！俺相手に詐欺働いたり、人を盾にしたり、踏み潰したりして、いったい俺をなんだと思ってるんだ！！」

なのに、彼はそう思っていないらしく、あっさりかみ付いてきた。

けれど、聞いて後悔した。

ちよつぴり期待した僕が馬鹿だった。

「そんなの決まってるじゃん、ギャグ要員」

とりあえず、さつさと答えてあげよう。

なんか、時間の無駄だし。

そんな事をするより、さつさと家に帰って寝てしまふほうが万倍ましだ。

「ふざけんじゃねえ！！親友相手に言う事が、それは！！」

だけど、それが気に食わなかったのか、余計に怒る。

なぜ、怒るのだろうか？

むしろ、おいしい役回りだと思うが。

とりあえず、出川や竜ちゃんなら喜ぶと思うのに。

むしろ、ギャラを払ってくれるかもしれない。

いや、逆に払って貰うべきなのだろう。

そうとなれば、いくら貰うべきだろう。

とりあえず、こいつは、あんまりお金を持っていないだろうから……

「よし、千円を出せ」

「お前、絶対反省してないだろうが!!」

そう催促してみたが、逆によけいに怒られた。

本当に変な奴だ。

陽炎

ぼんやりとしながら、僕は、窓の外を見た。

とりあえず、今は授業中。

なので、比較的平和だ。

平和じゃない学校なんて、ものすごく嫌だが。

まあ、だからと言って、家が平和かと言ったらそうでもないし。

気がついたら、両親と仲良くなってたし、あの悪魔。

いつでも、嫁に来てね、なんて恐ろしい事まで言わせてた。

本当に恐ろしい限りだ。

とりあえず、どうにかならないものだろうか。

とはいえ、うちの両親にそんな事をいったところでどうにもならないだろう。

なんだかんだ言って心配しているのだろう。

僕の事を。

僕の性格じゃいつまで経っても恋人なんて出来ない。

それを心配して、協力しているんだろう。

まあ、その方法があまり好ましくないが。

せめて、既成事実を作らせようとするのはどうかと思うし。

親のさせる事じゃないと思う。

とりあえず、この時期なら、親なら、させようとは思わないはずだ。

責任なんてとれないわけだし。

なのに、うちの親と言ったら、ホント……

ホント変な人だ。

まあ、そんな中でよく、僕みたいな普通な子が育ったと思うよ。

とりあえず、僕は偉大だ。

「紺野、この問題といてみろ」

「全く分かりません」

「ごめんなさい、嘘です。」

とりあえず、僕は偉大じゃありません。

出された問題は結局解けず、白旗。

僕が偉大だなんていう事は陽炎のように消えて言った。

わたくしがお相手致します。

それはいつもどおりの放課後の事だった。

普段と変わらず我が友と賭けをしていた。

今日はトランプ。

その中でも、五枚大富豪と言う奴だ。

とりあえず、最初に五枚ずつ持って、出せなくなったら、一枚ずつ引き、最終的にゼロ枚になれば勝ちと言うシンプルな賭け。

オッズは一枚残りに付き十円。

つまり、三枚残ったら三十円って言う事だ。

そして、ただいま、僕の驀進中。

圧勝中と言う事だ。

別にいかさまはしていない。

何回か負けを喫してもいる。

ただ、勝つときの僕の勝ち方が圧倒的なため、どんどんたまっているのだ。

「ほい、これで、また俺の勝ち。いや、ついに500円の大台に乗

りましたな」

そして、また勝利。

にやりと笑ってそう言ってやる。

賭け金額にしては大した事はないけど、それでも、オッズの低さからするとかなりの配当だろう。

50倍だし。

「く、くそ……」

その歯がゆさに我が友は奥歯をかみ締めている。

相変わらず、運のない男だ。

まあ、運があれば、こんなところで、こんなしみつたれたような事をしなくてもすんだだろうが。

とりあえず、素材はいいわけだし、うまくやれば、彼女の一人や二人すぐにできるだろうし。

まあ、それができないのが、我が友だけだ。

「さあ、降りるか、乗るか、どっちなんだ？」

そして、さらに詰め寄る。とはいえ、もうこれ以上はやらない事は目に見えている。

引き際と言つ物をしつかりと知ってるし。

もし、ここで、続けたら、もう後はずるずるとなる事は目に見えて
いる。

「ちつ、降りるよ」

そして、僕の予想通りに降りた。

まあ、それでなくちゃ僕の友なんてやってられないけど。

それはいいとして、ちゃっかりと賭けの代金をもらつ。

まあ、これでジュースでも飲むか。

せっかくだから、我が友にも奢つてやるか。

なんと言つても、僕は優しいから。

そんな事を思いつつ、立とうとした。

けれど、それよりも早く

「今度は私がお相手致します」

にこりと笑つて、一人の少女が座る。

とりあえず、言わずと知れた悪魔さんだ。

「そして、私が勝ったときは、一日中一緒にいてもらいます。もち

ろん、夜も……じゅるり」

そして、その悪魔はにやりと笑うと恐ろしい事を言ってくれる。

つまるところ、僕の貞操を差し出せ。

そういう事なのだろう。

だが、甘い。

今日の僕は、とりあえず絶好調。

しかも、その気になれば、いかさまだって出来る。

ならば……

「分かった。その代わり、僕が勝ったら、僕の事を諦める事。いいね？」

にやりと笑って、それを受ける。

彼女もこくりとそれを頷くところ、かなり自信があるのだろう。

だが、今日は、僕の勝ちだ！！

そう勢い良く念ずると、いかさまをするべく、カードを切って、勝負を始めた。

そう始めたのだ……

だけど……

結果だけ言おう。

負けた。

これでもかって言うぐらいに負けた。

こちらが、いかさましているはずなのに、負けた。

そして、あっさりと僕は陥落した。

そんな僕の姿を見た友は笑っている。

ちなみに、その後どうなったかと言うのは、また別の話だ。

千切れて流れて

誰もいない放課後の教室。

既に窓から差し込む日の光は赤く、夕暮れ時である事を表している。

そして、目の前にいるのは、見目麗しき美貌の少女。

しかし、それは表だけで、中身は絶望的なほどまでの悪魔。

その悪魔は涎を垂らさんばかりに僕の事を舐めまわすようにしている。

その逆に、僕は、動けないでいる。

いや、そもそも動けるわけがないのだ。

両手両足をしっかりと縄で縛り付けてくれてるし。

おまけに、助けを呼ばせないつもりなんだろう。

猿轡までしっかりとかませている。

つまり……

彼女は、ついに禁断の世界へと渡ろうとしているのだ。

「もがーもがー!!」

とりあえず、一生懸命になって助けを呼んでみる。

だけど、やはり無駄な事。

言葉にならず、ただ虚しく教室に響くのみ。

そんな僕を目の前にして彼女は、怪しく笑い

「大丈夫。すぐに、もう何も考えられなくなるから。ただただ、快楽を味わうだけの生きた蠟人形になるだけだから」

そう耳元でつぶやく。

途端に、身体に悪寒が走る。

やはり、彼女は、この僕の身体を骨の髄まで味わうらしい。

このもぎたて果実をいただくという心積もりなのだろう。

くそ、やはり、油断したのが失敗だった。

一瞬の隙を突いて、まさかクロロフォルムを嗅がせるとは!!

今でも、悔やまれる。

だがしかし、そんな事を言っただけでも何も解決しない。

とりあえず、打開策を考えなくて……

「ひい!!」

そう思ったところで、彼女がそつと服の中に手を忍ばせてきた。
もうそれはそれはいやらしい手付きで、僕の上半身を撫で回す。

「ああ、やつぱり、都君の肌って気持ちいいわ。もうぞくぞくしちやう。じゅるり」

しかも、当の本人は完璧にトリップしている。

もしかしないでも、麻薬でもやっていらっしやるのでしょうか？

いや、もうきつとやっているに違いない。

そうじゃなきゃ、こんなことするはずがない。

とりあえず、そう言う事に決定だ。

よし、これで、解決……

で、違うわー!!

まずは、この状況を

「もう、全部が煩わしいわー!!脱がしちゃいましょうー!!」

「ひぎいー!!」

縄を解き、もう服を破り捨てる。

もうなんだか、その姿は男らしすぎる。

というか、僕の制服が……

びりびりに破れ、窓から、ひらひらと風に乗って、流れていく。

これは、つまり……

「いやあああああ!!」

とりあえず、あられもない姿と言っわけです……

下着姿とか……

しかも、男だし……

こんなのじゃ、視聴率稼げませんよ!!

もう、僕の中でも壊れてしまった。

「うへへへ。大丈夫。最初は痛いかもしれないけど、すぐに良くなるから」

しかし、そんな僕よりも、もっと壊れた彼女。

もう既に、女を捨てたのだろう。

涎を垂らし、変態おやぢさながらの姿をして、僕の下着に手をかける。

そこは、最後の砦。

これが取られたら、きっとこの小説は終わりだろう。

なら、どうする。

どうする、俺!!

で、それはライ。カードだ!!

今は、そんな冗談を言っている場合じゃないと言っのに。

くそ、とりあえず……

肉を切らせて骨を断つか。

「愛してるよ、結奈」

僕は、泣く泣く、彼女のそう言つとキスをする。

とりあえず、これで……

「はうううう。幸せえええ」

隙は作れるだろう。

僕は、カバン等を取ると、その場から去る。

とりあえず、その途中で会った人達には変態扱いされてしまったが。

……
もう
やだ。

ギンノヨル

凜として、冷たい空気が漂う夜。

そんな日は空がとても綺麗なのだ。

そして、そんな夜は僕は大好きだった。

一番の癒しだった。

まあ、それを言うと、すぐにナルシストだなんていわれるけど。

とはいえ、それは否定はしない。

とりあえず、変なところで、そんな気のある僕だから。

と、それはいいとして、本当に星が綺麗だ。

こんな日は、あつたかい緑茶でも飲みながら、団子を食べたりする
のもいいだろう。

ちょうど戸棚にみたらし団子があつたし。

それを取ってくると、ベランダに出る。

大きな満月が僕達を照らしている。

僕は、それを眺めながら、お茶をすする。

まさしく、これこそ日本の夜の過ごし方だ。

うむ、風流。

そんな事が頭の中で浮かぶ。

だけど、次の瞬間、あの悪魔の哄笑が脳裏に浮かんた。

こうして、のんびりとしていたところに、いきなり現れて、

『さあ、夜は始まったばかりよ、めくるめく快樂の日々を！！』

なんていつている様が、だ。

もう地獄だ。

とりあえず、すぐにでも、払拭しないと。

お茶をすすり、団子をほおばる。

途端に、心が落ち着く。

やはり、日本人には、日本人らしい姿をしているときが、一番落ち着く……

「やはり、日本の夜と言えば、夜這い。さあ、今こそ、あたしの帯を取って、回してください！！」

わけないか。

どうして、こうお約束のように出てくるのだろう。

まあ、彼女だから、といわれれば、おしまいと言えはおしまいだけ
ど。

はあ。

とりあえず

「お断りだ！！」

ベランダから飛び降りて、逃げるのだった。

暖かな冬

「はふう」

僕は、身体をちぢこめて、手をさすりながら、息を吹きかける。

季節は冬。

毎年毎年、今年は暖冬だとか、言っけど、こちらとしては、毎年変わらず寒い。

しかも、うちの高校は公立の高校のせいか、服装に関しては無駄に硬い。

おかげで、コートの着用が認められず、寒い中、薄着で行くしかない。

まあ、そんな事言っつて、男子は、まだ楽なほうだと思う。

とりあえず、僕は、ズボンの下に更にジャージをはいてる。

上は、詰襟の下に、長袖のティーシャツ、ブラウス、セーターと着ている。

まあ、おかげで、そんなには寒くない。

それに、比べて女子といえば、基本的に、下はスカートなので、かなり寒そうに見える。

たまに、スカートの下にズボンを履くと言つつわものがあるが、とりあえず、それは見苦しいから嫌いだ。

それなら、スカートを脱いでしまえと言いたい。

それで、ズボンだけにしろと。

ホント、もう少し周りの事を考えて欲しいものだ。

それに、ついでに言えば、無駄に短いスカートもあれだ。

とりあえず、見苦しい。

まだ、足が細いなら、許せる。

僕だって、男だ。

短いスカートからすらりと細い足が見えるのは、好きだ。

だけど、だいたい、短いスカートの人に限って、太いのだ。

もう見ているだけで、腹立たしい。

とりあえず、もう全く許せない。

絶対に許せない。

今すぐ、ミニを脱がせて、ズボンを履かせてやりたいぐらいだ。

まあ、それはいいとして、この寒さはどうだ。

本当に、腹立つぐらい寒い。

とりあえず、暖冬だと騒ぐなら、薄着ですむぐらいになれって言うんだ、ホント。

かなり寒さに弱いんだから、どうにかして欲しいものだ。

「み・や・こ・くうくん。寒いよお」

なんて事を心内でばやいていっていると、不意に声がした。

いや、きつと悪魔の声に違いないだろう。

そして、今、身体にかかっている重みもまたあの悪魔なのだろう。

ついでに言うと、すりすりと身体を寄せてくるのも悪魔なのだろう。

きつと、寒さだ。

寒さにやられているんだろう。

まあ、その気持ちも分からないでもない。

僕だって、寒いし。

でも、本当は、こんな事をしていちゃいけない。

気を持たせるようなものだ。

だけど、この温もりが気持ち良すぎて、もうぐっしょりじゃない。

だから……

だから、もうここは、諦めて

「あつたかい」

されるがままになって置こう。

否定しあう僕ら

「ねえ、あたし美人だよな？美人を振るなんて、変！！」

「美人でも性格が合わなきゃ、だめだって言ってるだろう！！」

もう、これで何度目になるか分からない口論が続いている。

とりあえず、二人きりでない時は、いつもこんな感じだ。

もう盛大に押せ押せで行こうとする。

周りを味方にして、何が何でも手に入れようとする。

だけど、周りは味方にはなってくれない。

まあ、僕に取られるのが嫌なんだろう。

とりあえず、僕にとって、それは好都合だ。

「なんで、あたしがダメなの！！」

「だから、性格の不一致！！」

とはいえ、だからと言って、口論が止まるわけでもない。

もう、一生懸命お互いの意思をぶつけ合う。

「あたしの、何がいけないって言うのよ！！」

「とりあえず、二人きりになるところかまわず押し倒そうとするところだよ!!」

「だって、そうでもしないと、こっちに振り向いてくれないじゃない!!」

「そんなところが引くんだよ!!」

「んじゃ、そういうところ直すから、今すぐ好きになって!!」

「無茶を言うな、無茶を!!」

「なんで無茶なの!!」

「むちゃくちゃすぎるわ!!」

とはいえ、とりあえず、どちらとも意思を変えるつもりはない。

そのため、話は平行線上。

とりあえず、二人して、一生懸命に、否定しあっています。

どうかそのまま

僕はそろりそろりと足音を殺しながら、歩を進める。

とりあえず、時刻は放課後。

既に、授業は終わり、後は帰るだけになっている。

もちろん、帰るだけなんていうのは、誰にだってできる事だろう。

僕にだって、そんな事は出来る。

ただ、安全に。

そうになると、話は変わってくる。

僕は安全に帰るだけと言うのが非常に困難なのだ。

理由はただ一つ。

あの悪魔の存在だ。

あの悪魔のせいで、僕は、安全に帰る事が出来ない。

けれど、それも今日で終わらせるつもりだ。

とりあえず、僕は、トイレに行くと言って、彼女と別れた。

そして、トイレにはいると、トイレの窓から脱出した。

もちろん、足音を出来るだけ殺して。

そして、それはうまく行き、とりあえず、今は下駄箱付近にいる。

ただ、そこは、トイレのそばにあり、もちろん、その前には彼女がいる。

なぜか、興奮したように、はあはあと息をしながら、顔を赤めている。

拳句の果てには、トイレの前で行ったり来たりをしては、中に入ろうとしている。

もちろん、周囲の目があるから、本当には入らないが。

とはいえ、その行為自体が完全に変態だ。

しかし、それが大変困るのだ。

とりあえず、あの悪魔の感知能力はすさまじい。

さすがは第一世代と呼ぶべきか、鬼のような嗅覚を持っている。

下手な事をすると確実に気付かれる。

とはいえ、だからといって、このまま上履きで帰るわけにはいかない。

なので、今、こうしてそろりそろりと歩をゆっくりと進めているの

だ。

彼女が、不意にトイレに顔を突っ込んだ。

どうやら、周りに人がいなくなったのを、しめたと思ったのだろう。

僕の姿を確認している。

まさしく、千載一遇のチャンスだ。

とりあえず、どうかそのままいてください。

そつ心の中で祈りつつ、上履きを脱いで靴を取る。

それと同時に彼女の方もしつかりと確認する。

すでに、そこに、彼女の姿はいない。

おそらく、トイレに入ったのだろう。

羞恥心と言つものはないのだろうか？

いや、とりあえず、人がいないから、やっているんだから、羞恥心とかは関係ないかもしれないが。

それでも、恥を知って欲しい。

きつと、あれだ。

周りに人がいない事をこれ幸いと思って、そこで押し倒そうとして

いるのだろつ。

なんて、浅ましい考えた。

けれど、甘い!!

とりあえず、ロシアの黄色いお菓子ぐらい甘い!!

僕は、今から自由となる。

青い翼を持った機体に乗って、飛び立つのだ。

「ミヤコ・コンノ、フリ。ダム、行きます!!」

靴を履き替えると、そう声高く叫ぶと、僕はその場を後にする。

そして、外に出た瞬間。

「はい、捕まえた」

あっさりと捕まってしまいました。

しかも、僕が先ほど通っていたところから出たところを考えると、
きっと僕と同じ事をしたのだろつ。

とほほ。

築き上げた空

「ねえねえ、何で空って青いんだと思う？」

隣にいる少女は唐突にそう尋ねてきた。

暖かそうなファーつきのコートを来ている。

とりあえず、それは完璧に校則違反なんだけど、誰もが彼女に関しては容認している。

まあ、彼女に文句をいえるような人はいないのだ。

それに一応、今は校外。

その時点で文句は言えない。

言ったところで、さつき持ってきてもらった。

そう言えばおしまいだ。

まあ、それ自体が事実なんだから、どうしようもないけれど。

とりあえず、さつき黒塗りのロールスロイスのリムジンに乗った人が彼女に渡していた。

それに乗って、さつさと帰ればいいようなものを、しっかりと僕にくつついている。

まあ、僕も今はそれを容認しているけど。

だって、暖かいんだもん。

やっぱり、冬場は寒くて敵わない。

だから、どうしても、この悪魔をカイロにしたくなる。

べつたりとくつついてくれるから、本当に暖かい。

もちろん、そんな状態だから、いつもよりもちょっぴり優しい。

当社比1.5倍って感じた。

まあ、どんな感じだ、って感じだろうけど。

それよりも、彼女の問いかけに答えなくちゃいけない。

とはいっても、それは問いかけと言うよりも確認なんだろう。

そんなニュアンスを匂わせるような問いかけをしている。

まあ、もちろん、僕はなぜ青いかは知っている。

「色の散乱でしょう?。」

まあ、そついう事だ。

とりあえず、これぐらいは常識だ。

「ぶぶー、あたし達みたいな青い果実達の思いが詰まってるからでした」

が、あっさり、切り捨てられた。

というよりも、なんだ、それ。

「ごめん、それ普通に寒い」

すさまじく寒い。

なんというか、もうとりあえず、ありえないほど寒い。

しかも、はにかみながら、どうだと言わんばかりの顔をしているから余計にだ。

「というか、これ以上一緒にいると凍えちゃいそうだから、帰るね」

もう、これ以上一緒にいる気はうせた。

とりあえず、これ以上一緒にいると凍え死にそうだから。

恋せよ乙女

「そういや、ここ最近、お前の周りに竹原さんいないな」

今日一日の荒仕事を終えて、机の上でのべーと突っ伏していると友人が唐突に切り出した。

「そう言えば、そうだな」

その問いかけに、一瞬顔をしかめた。

まあ、せつかくの安らぎの時間の時に、悪魔の名前を出すなど思ったのだ。

とはいえ、それもすぐになりを潜める。

友が言ったように、最近うれしい事に寄って来ないのだ。

とりあえず、今の生活は完全に平穏と化しており、気が抜ける状態なのだ。

何を考えているのかは知らないが、迷惑をかけてくれない分助かる。

「そういや、ここ最近、我校の貴公子の周りに竹原さんがいるらしいな」

けれど、友の言葉を聴いた瞬間、スイッチが変わった。

我校の貴公子。

一度だけ、その人物の名を聞いた事がある。

その名は伊集院久遠。

あの悪魔とまではいかないが、それに近い財力を持った家の御曹司。

そして、外見特徴は、日本人らしくない日本人。

色素の薄い肌とさらさらの髪を持ち、しかも、顔はまさしく美少年。

さらに言えば、あの悪魔と同じく第一世代レベルの能力を持つ。

つまり、頭脳明晰にして運動神経もいいと言う文武両道なのだ。

しかもしかも、さらに男からも好かれるような性格をしており、まさしく最強。

あのどこぞの大和撫子と同レベルなのだ。

しかし、その貴公子とは

「なんだ、ショックなのか？」

友の言葉を聞いて、うんうんとうなっていると、不意にそう問いかけてきた。

どうやら、僕が降られた事にショックを受けていると思っているのだろう。

だがしかし

「甘いな。命短しコスセよ……失敬。命短し恋せよ乙女。そういうだろう？僕は、そんな彼女を応援するぞ。と言うよりも、ぴったりじゃないか、あの二人なら。家柄、容姿、才能、性格。全てに置いてパーフェクト。いや、マーヴェラスだな、このレベルなら。それを応援しないで、何を応援すると言うのだ、瀬川三等兵」

なぜ、この僕が、ショックを受けなくてはいけないと言うのだ。

むしろ厄介ことから逃れられるのだから、泣いて喜ぶべきだ。

とりあえず、まずは状況判断が先だ。

「よし、情報収集にいくぞ、瀬川三等兵！」

そのためには、何よりも情報。

まず情報。

だから、偵察が必要だ。

「いや、別にかまわないけど、なぜに俺が三等兵？」

「うるさい、下士官は黙って付いてくればいいのだ！」

「しかも、やっぱり、俺ってお前より下なのね。」

とりあえず、まだぐちぐち言っているが、この際無視だ。

話が進まないし。

ちなみに、僕は、大佐にまで昇進した。

以前の、悪魔の魔城から無事孤立無援で脱出をした功を取り立てて貰ったのだ。

今思うと、それに関しては素直に謝辞を言わねばならないのかもしれない。

とはいえ、それよりも、まずは

「貴公子の下へ！！」

その男の下へといざゆかん！！

そつ心強く心内で叫んでから行つた。

薄っぺらな真実

こんな事しなければ良かった。

目の前には、貴公子と悪魔の二人。

だが、その二人の会話はまさしくすさまじい。

というよりも、上流階級の人間がするような恐ろしく優雅な会話。

僕の前とは大違いだ。

もしかすると、本当の恋をするとこのレベルにまで達すると言っのか？

恐ろしい。

もし、あんな姿で来られたら、きっと僕みたいな純粋な子はあると落とされてしまうだろう。

いや、あの姿で迫られて助かった。

しかし、これで良く分かった。

彼女は、本気なのだろう。

ならば

「おい、瀬川三等兵。あの貴公子に襲いかかって来い」

「はあ！？なんでだよ！！」

いい作戦が思いついたので、とりあえず、命じてみたのだが、どうやらおつむが僕以下らしく、ついてこれない。

「ばかめ。ここで、貴公子に絡んで、それをあの悪魔が貴公子のどちらかが倒せば、いつきに盛り上がるだろうが」

つまりあれだ。

貴公子が倒せば、それはつまりそれなりに気があると言っ事。

それが分かれば、あの悪魔はきっとそのまま告白するだろう。

確信へと変われば、きっと行動に出るはず。

そして、その逆に悪魔が倒せば、あの貴公子も恋に落ちるだろう。

僕が見たところ、あの貴公子は頼りになる女性が好きそうなタイプだ。

「というわけで、さっさと行け！！出番が欲しいんだろっ！！」

というわけで、無理やりクランクアップ。

とりあえず、さっさとくつつけてしまおう。

そうすれば、僕も平穏となる。

そして、あの悪魔も幸せ。

まさしく、最高のシナリオじゃないか。

というわけで、どうなるだろうか。

そう思って、事の成り行きをうかがおうとした。

が

「いやん、助けて、都君」

なんて言って、いきなり悪魔が僕に飛びついてきた。

いや、何故に!?

思いつきり、自分の予想とは真逆に行かれて正直びっくり。

いや、待て。

もしかすると、これは・・・

「うん、きっと都君は、あたしを助けにきてくれるって信じてた。だって、噂を心配して、あたしの事を見に来てくれたんだもん」

そして、彼女の言葉を聞いて、確信へと変わった。

「謀ったな!？」

そうだ、謀ったのだ。

きつとあれだ。

僕にやきもちなんて物を焼かそう。

そんな感じなのだ。

残念ながら、そんなものは全く焼かなかったが、周りはそう思わないだろう。

ああ、なんて事だろう。

まさか、逆に僕が踊らされるなんて。

もう少し、後先を考えれば良かった。

愛し子よ

今、僕は、かなりの瀬戸際に立っている。

我前の獅子に後門の虎。

まさしく絶体絶命のピンチ。

「にゃ〜ん」

そして、その最強最悪の力の主が鳴く。

本当はそんな鳴き声じゃないくせに鳴く。

というよりも、鳴かないくせに鳴く。

いや、あれの時に鳴くには鳴くらしいが……

で、そんな下ネタはいい。

とりあえず、目の前にいるのはあの悪魔。

その悪魔が鳴いているのだ。

しかも、猫の格好をして。

正直に言おう。

僕は可愛い物が大好きだ。

しかも、小動物系は大好きだ。

そんなわけで、猫も大好きだ。

そして、目の前にいる猫も大好きなんだよお

いや、もちろん、特別な趣味があるわけじゃない。

あるわけじゃないんだが

そんな垣根など越えてしまいたいほど可愛いのだ。

とりあえず、可愛すぎるのだ。

あのゆらゆら揺れる尻尾が特に。

「にゃん」

そして、再度彼女が鳴く。

それと同時に、僕に擦り寄ってくる。

僕は、それを拒絶できない。

むしろ、喜んで受け入れ、抱きしめると頬にほお擦りする。

ああ、なんて幸せなんだろう。

そんなふうに思っ、更に顔を緩める。

もう、既に限界を超えている。

とりあえず、どうにでもなれと言ったレベルに近づいている。

「うなあ」

そして、さらに彼女は可愛く鳴く。

それと同時に、ごくごくそと音がする。

ほとんど陶然としている頭で必死に考えて見る。

すると、そこで下半身に違和感を感じた。

何かに触られているような気がする。

その瞬間、ようやく理解できた。

それと同時に、どこかにいきかけていた頭をはっきりとなった。

「あ、あぶない……もう少しで貞操が奪われるところだった。」

そうごくごくとしていた音はあの悪魔が、僕のズボンを脱がそうとしていたのだ。

なんという奴だ。

まさか、そこまでするとは。

僕は額に浮かぶ汗をぬぐう。

本当にぎりぎりだった。

もし、完全に思考を奪われていたら、きっと手遅れだっただろう。

けれど、それもなんとか耐え抜いた。

とはいえ、それも一度で限界だろう。

「悪いけど、帰らせてもらっよう!!」

ならば、帰るしかない。

僕は、しゅたつと手をあげると、その場を去る。

とりあえず、置き土産に、投げキッス。

これで、ある程度、時間は稼げる。

そして、予想通り、腰を砕けさせた彼女は、その場にへたり込む。

にしても、あの姿はまさしく恐ろしかった。

あそこまで、あの悪魔を愛しく思えるとは

次からは気を付けないと。

例えばあなたが悪魔でも、例えば未来が暗くとも

「うふふ。今日こそ、都君の貞操をいただくわよ」

前回と全く同じような状況に僕はおかれていた。

とりあえず、前回はなんとか逃げ出した。

鳴りだした携帯を理由に、だ。

おかげで、変なところで常識的なところがあるので、なんとか逃げ切れた。

けれど、今日もまた追い込まれてしまった。

何が何でも、既成事実を作ろうと言う魂胆なんだろう。

正直言つて、勘弁して欲しいものだ。

とはいえ、それでも、未来は明るい。

なんと言つても、僕の手には文明の利器、携帯がある。

これを使えば……

使えば……

「何故に圏外?!」

使えば、逃げ切れるだろうが、なぜか圏外。

以前は使えたはずなのに、圏外となっている。

「うふふ。もう前回とは同じ手は食わないために、この部屋いったいにはジャミングをかけてるの。だから、電波は届かない」

「はう?!そこまでするか?!」

しかし、僕の疑問に、彼女はあっさり答えてくれた。

ただ、その答えは非常に頭が痛い。

とりあえず、かなりやばい状況だ。

目の前には悪魔。

しかも、完全に追い詰められているため、未来はかなり暗い。

とは言っても、やはり諦めるわけにもいかない。

さあ、どうする、僕。

どうするよ、僕?!

で、だから、それはライフ。ードだって!!

もう、どうして、こんな大事な時に限って、そんなくだらない事ばかり考えるかな……

まあ、現実逃避がしたいだけなんだろうけど。

「さて、それじゃあ、いただきます」

なんて、そんな間に、じりじりと間を詰めた彼女は、いつきに詰め寄ってくる。

ああ、このまま、餌食になってしまうのだろうか。

そう思いつつも、必死に抵抗した僕だった。

まあ、そのおかげで、とりあえず、貞操は守れた。

守れたけど……

上下の下着以外全部取られてしまった。

彼女は、僕を凍死させる気なのだろうか？

まあ、僕が逃げるために、それを使ったせいなんだけど。

散る散る満ちる

僕は、逃げ道を探していた。

けれど、出口はたった一つ。

僕が入ってきた入り口だけ。

だけど、そこはすでに、悪魔の手によって、閉ざされている。

それはつまり、悪魔をどうにかしない限り、僕にはどうすることもできないと言う事。

とはいえ、僕ではこの悪魔には勝てない。

第一世代で、しかも覚醒している彼女。

そんな彼女に種を持たない僕がどう対処できる？

せいぜい、軽くあしらわれておしまいだ。

しかも、最近、ちよっぴり耐性が出てきたみたいで、簡単な事では思考回路が破壊されなくなって来ている。

つまり、捧げるものが以前よりも大きくなってきているのだ。

けれど、僕としては、以前まで捧げていたものがぎりぎりの範囲の物。

というか、あれですらあげすぎだ。

とりあえず、もう既に僕の身体の半分くらいは汚れきってるし。

絶対、僕が女の子だったら、自殺物だと思う。

だって、好きでもない異性にべたべた身体を触られるんだよ？！

しかも、脱がされちゃったりするわけだよ？！

これが、まだ僕が男で悪魔が女だから、騒ぎにならないけど、本当にやばい。

まあ、きつと、これが僕じゃなくて、他の人なら喜んでるだろうけど。

ホント、どうして喜んでくれる人じゃなくて、嫌がる人にやるのが全く分らない。

もしかして、エス気質なんだろうか？

でも、僕自身もどちらかというところエス気質だから、それじゃ絶対にあわない。

お互いがお互いをなぶり合うとかおかしい状況だ。

「さあ、めくるめく快樂の日々へと――！」

「ぬおおおお」

と、そんな事を考えているうちに、襲いかかって来た。

どうやら、考え込みすぎたみたいだ。

それでも、なんとか避けきつたのだから、なかなかのものだ。

とはいえ、いつまでも持ちそうもないが。

瞬間的な切れ味は彼女の方が上。

筋肉の使い方がうまいせいなのだろうか。

体力、筋力自体は僕の方が上なのだけれども、爆発力は目を見張るものがある。

以前も、僕の方が瞬発力があるからと、高をくくっていたら、近距離での攻撃をあっさりと受けてしまった事がある。

だから、いつまでも、のんびりとはしてられない。

どうにかして、打開策を考えなくてはならない。

とはいえ、相変わらず出口は一つ。

しかも、なぜか内側にも鍵穴があり、そこに鍵を差し込まない限りあかないようになってる。

とはいえ、だいたい予想はついているが。

「もう、逃げ道なんて物はないわ!!」

それに、のんびりと考えている場合ではない。

まずは、どうにか逃げ出す方法を。

そんな事を考えながら、彼女の攻撃を避ける。

すでに、何十回との突撃を食らっているため、ある程度先読みは出来る。

そのせいで、なんだか自分が人外に思えたような気がするが、きつときのせいだろう。

それに、この程度なら、誰にだって出来るはずだ。

だいたい、彼女もワンパターンだ……

そこまで思ったところで

「捕まえた」

あっさりと捕まってしまった。

ワンパターンな突撃。

だけど、それはフェイクだったのだ。

いきなり軽いフェイントを入れてきたのだ。

「うふふ。もう、これで都君の初めてはあたしのもの」

おかげで、この状況。

舌なめずりして、僕の事をがちりと抱きこんでいる。

僕は、絶望した。

そんな中、自分のポケットで、携帯の鳴る音がした。

そこで、ようやく気が付いた。

携帯を使って我が友を呼び出せば良かったのだと。

まさしく、心境は青い鳥に出てくるチルチルとミチルのようだった。

自己流

今日の家庭科の授業は、調理実習だった。

メニューは決まっていらない。

適当に自分達が好きなように決めろ、との事だった。

とはいえ、ちゃんと予算は決まっている。

まあ、予算を無制限にして、目玉が飛び出るような額にでもされたら困るだろう。

実際、最初の内予算の事何も言わなかったら、馬鹿みたいに高い額にした奴もいたそうだし。

もちろん、それが誰なのかは言わなくても分かるだろう。

金銭感覚のずれた人間なんてこの学校にそうはいない。

もちろん、クラスが別だから、その様子は見れなかったけど。

まあ、見たいとも思わないけど。

さて、それはいいとして、さっさと調理を進める。

僕の班は僕と瀬川の二人だけ。

本当なら、もう二人ほど女子がいたのだけでも、いなくなっ

まった。

まあ、理由はある程度予測が付く。

あの悪魔だろう。

あの悪魔が、女子は何人たりとも僕に近づけないために、教師にまで根回ししたのだろう。

よく、そこまでやるといった感じだ。

とはいえ、そのおかげで仕事は倍増。

なので、間に合うかどうかは、微妙。

というのが、普通なのだが、残念ながら、僕は違う。

極悪母の下、生きてきた十数年間。

そのおかげで、料理を覚えた。

なので、時間短縮なんてお手の物。

とりあえず、朝食なんて作ってくれなかったから、時間短縮の技を覚えないと、作っているうちに、登校時間になったりする。

「いくぞ、瀬川一兵卒」

「いつのまに、そこまで、位が下がる?!」

「うるさい、下士官は上官の命令に忠実に従えばいいのだ。」

だいたい、下がって、当然なのだ。

全く役に立たない、それどころか害毒にしかない男など。

僕だって、何度か降格の憂き目に会ってきたのだ。

それをなんとか越えて来たからこそ、今もまだ大佐でいられるのだ。

いつかは、議長にまで上り詰めるつもりだから、何が何でも降格なんてしてられない。

もちろん、今回のミッションだって、査定に入る。

「とりあえず、僕の言う通りに動け!!」

なので、ここは華麗に事を進めないといけない。

自分の作業をしつつ、我が友に指示を出す。

しかし、意外と、言うべきか、手先が器用なのもあって、なかなか役に立つ。

これなら、三等兵ぐらいにあげてやってもいいかもしれない。

そんな事を思いつつも、僕も手早く下ごしらえをしていく。

料理で一番大事なのはやはり下ごしらえ。

もちろん、味付けだって大事だけど、ある程度、それはしっかりと分量どおりにすればどうにかなる。

むしろ、下ごしらえなんかは本人の技量によって変わるから、一番気を付けないといけない。

それに、今回のように人員が少ない場合は、それが顕著になる。

とりあえず、手早く済まさないと時間が間に合わなくなる。

その分、調理自体にはさほど時間がかからないから、やはり下ごしらえて決まる。

とはいえ、それも、思った以上に使える我が友のおかげでどうにかなりそうだったけど。

最初から期待していなかった。

というよりも、邪魔にしかないだろうと予想しての時間配分で、考えていた分、余裕ができそうだ。

これなら、あまった材料でいろいろとできそうだ。

元々、四人分で頼んでいたから、量があまったのだ。

「ふはははははー!!」

思わず哄笑をあげてしまう。

周りが奇異の目で見てくるが、関係ない。

やはり料理は楽しい。

しかも、自由自在に動いてくれる手足があるとなれば、さらに倍増。とりあえず、奴隷のように働かせてしまおう。

そして、それから、しばらくして、全部完成した。

周りはまだあわただしく調理中。

「すごいなあ。全く、お前の腕には驚いたよ」

目の前にいる我が友が出来上がった料理を見て、そう感慨深げに言う。

まあ、その気持ちも分かる。

とりあえず、時間短縮のためにいろいろとやった。

普通のやりかたではない。

完全に我流で作った。

それが、普通のやり方しか知らない瀬川には驚きだったのだろう。

だが、これぐらいやれなきや我が家では生きていけない。

それに、味だってやはり普通レベル。

日本人の舌が誇る妙味レベルには達していない。

そこらへんが、やはり僕の限界だ。

「さあ、さつさと食うぞ」

「ああ、そうだな」

「えへへ、都君の手料理」

それはさておき、さつさと食べてしまおう。

冷えてしまったら、おいしくないし。

まあ、ハーフェンジェルの彼なら、冷えてもおいしいものを作れるかもしれないが。

僕は、目の前にある料理に次々と皿によそい、食べて行く。

瀬川三等兵も、飢えた獣よろしくがつがつ食べている。

そして、隣にいる少女は、昇天しそうなほど幸せそうな顔をして食べている。

隣の少女？

そこまで、考えて疑問が起きた。

ここは、僕と我が友の二人のはず。

なので、もう一人いるなんておかしい。

だから、隣には誰もいないはず。

いや、もついい。

また、きつとお約束だ。

読者もいい加減飽きてくるお約束だ。

だから、気にする必要もないだろう。

隣にいる少女の事を完全に無視して、僕はさらに箸を進めたのだ。
た。

くだらない言動

「ねえ、なんで、あんな男が好きなの？」

もう何十回目かになるその問いかけ。

友人達がそう聞いてくる。

私が、彼の事を好きなのが、どうしても理解できないのだろう。

それこそ、暴走してまでも。

だけど

「それは秘密。私だけの大切な思い出だから」

教えてあげない。

本当の彼を知ろうともしない人に教えるなんてもったいなさすぎる。

そりゃ、彼は大して頭がいいわけじゃない。

容姿だって、平均並だし、運動神経も並だし、家も平凡のサラリーマン家庭。

目立つ要因はない。

いや、最近、私に感化されたせいかな、すこし壊れ気味だけれど。

この前も、壊れたような笑い声を上げてたみたいだし。

それを思うと、本当に申し訳ないと思う。

彼の心はそんなに強くない。

理由は分からないけどそう思う。

なのに、周りからはやっかみを受け、私からはしつこい、それこそストーリーカーや性犯罪者と変わらない事をされたら、そうなのかもしれない。

だけど、そんな事が分かっても止められない。

それどころか、どんどん想いは強くなっていく。

今では、少しでも離れると耐えられないほど寂しくなる。

「それじゃ、私は都君のところに行くね」

だから、私は友達と別れて彼のところに行く。

本当なら、こんな事はしちゃいけない。

自分の恋に頭一杯になって、友達の事をないがしろにすることなんて。

だけど、それは、その友達が本当の友達だったらの場合だ。

もし、その友達が単なる形式的な友達だったら、関係ない。

女子同士の関係は非常に淡泊だ。

そして、それと同時に残酷だ。

表と裏を使い分けて、交流を深める。

彼女達だって、裏では、私のことを笑っている。

趣味が悪いとか、単なる淫女とか、精神がいかれているとか。

まあ、自分だって、自分のしている事がおかしいことぐらい分かっているから、言われても仕方ないとは思っている。

ただ、そんな事を言っている人を本当の友達とはやはり思えない。

それに、見る目のない人と付き合うなんてナンセンスだ。

以前、都君を騙すために、伊集院君の周りをうるちよろしている頃があった。

その時、彼女らは、ようやく自分のレベルに見合う男を選ぶようになったんだね。

そう言った。

自分のレベル？

思わず、それを聞いて、心の中で笑ってしまった。

彼女達が言う同じレベルと言うのは、容姿や成績、運動神経、家柄の事なのだろう。

だけど、私から言わせて貰えば、くだらないとしかいいようがない。恋をするのに、そんなものが要だとはどうしても思えないからだ。もちろん、全く必要ないとは言わない。

私だって、子供じゃない。

ある程度の現実は見てきた。

だから、愛だけではどうにもできない事ぐらい十二分に分かっている。

だけど、だからといって、そんなものがないと絶対に恋が出来ないなんて思わない。

そんなものに頼り切った恋では、おもしろみがない。

打算だけの関係で、恋愛感情が芽生えるわけがないのだ。

もし、打算だけの関係のくせに、それを恋と呼ぶ人がいたら、私は笑ってやろうと思う。

それは、恋ではないと。

いや、違うか。その人を恋しているのではなく、自分に恋している。

そういう事だと。

そして、その恋人の事をアクセサリーとしてしか見ていないのだと。自分をより良く見せるためのアクセサリーとして。

だけど、私は違う。

彼の事が本当に好き。

それは、彼をアクセサリーとして見ているからではない。

そもそも、そんな価値が彼にはない。

ただ、彼は私を満たしてくれる。

そう思うから、恋している。

この満たされない想いを満たしてくれる。

渴ききつた心を潤してくれると。

それに、だいたい、伊集院君の価値はそういった先天的なものじゃない。

以前の交流のおかげで、彼の人となりが分かった。

彼は本当に良い人だった。

私の内心に気付いたのだろう。

私の作戦に手伝ってくれた。

だから、彼の本当の価値はその優しさ。

心の広さだ。それに、気付かない人達に、笑われるつもりはない。

「み・や・こ・くうくん」

そして、私はいつもどおりに彼に抱きついた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3230q/>

変人達のラブソディ

2011年6月12日17時38分発行